失われし物を求めて

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われし物を求めて

【Ｎコード】

Ｎ３２８５Ｂ

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

黒の組織を壊滅させ、後は解毒剤の完成を待つだけになった新一達。そんな中、新一（コナン）がそれを見つけた時、新たな物語が始まった。謎の少女、米花町の地下の旧時代の遺産。そしてそれを巡る人々の物語。前作ＢＲＥＡＫＤＯＷＮの続編です。

プロローグ（前書き）

この話はＢＲＥＡＫＤＯＷＮの続編です。注意してください。

プロローグ

１９４５年７月

「生命維持装置はこれしか作動しない。お前が入りなさい。」

暗闇の中で、男が言った。

「け、けどお父さん。」

少女は父の命令にためらっているようだ。

「大丈夫だ。父さんは戻ってくる。しばらくここに入ってれば大丈夫だ。必ず戻ってくる。さ、入りなさい。」

そう言われて、少女はカプセルのような物の中に入った。

「お父さん！！」

少女の叫びをかき消すように、父親は扉を閉める。少女の意識はそこで途切れてしまった。だが最後に父親はこう言い残していた。

「すまない。」

プロローグ（後書き）

というわけで始まりましたが、これだけではまだ全く話がわかりません。というわけで、次話を読んで下さい。

発見

２００７年

この日、コナンは米花町の外れの小高い丘の上にある古い神社にいた。その神社は雷神社と言って、小さな祠が一つあるだけで、その祠も手入れがなされていない、半ば世間から忘れさられた場所であった。ただ、周りは竹林に囲まれ、祠の前には広場もあるから、子供達にとっては、今や貴重となった格好の遊び場であった。そして、コナンもこの日、おなじみの探偵団の仲間に誘われて、今は帝丹小学校の同級生になっている蘭や平次、快斗達と一緒にここに遊びに来ていた。

今やっているのはかくれんぼである。不幸にもコナンはじゃんけんで負けてしまい、鬼であった。

コナン
「勘弁してくれよ。」

これが探偵団だけならまだしも、相手は８人である。相当厄介だ。ちなみに、８人とは探偵団の３人に、蘭、平次、和葉、快斗、青子のことである。哀は今、ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤開発に熱中しているのでここにはいない。

平次
「ほんなら工藤、しっかりな。」

蘭
「新一、ちゃんと探してよ。」

そう言って、皆一斉に隠れた。鬼であるコナンは1分間待たなければならない。

コナン
「ったく。一分がすんげー長いぜ。」

愚痴をたれるが、それでどうこうなるわけでない。とにかく待つしかない。

コナン
「それにしても、この神社ますますぼろくなってるな。」

祠を眺めながら言う。神社の祠は今や荒れ放題である。コナンも子供の頃から何度も遊びに来ているが、そのころから無人になっていたから、もう10年以上も手入れがされていないことになる。

コナン
「このままだとそのうち壊れちまうぜ。」

そう言って、祠の下を覗き込む。その時、コナンは気づいた。

コナン
「うん!?」
奥のほうの柱に、何かがくくりつけられているように見えたのだ。

コナン
「何だろう?」

腕時計型ライトを点け、祠の下にもぐりこむ。もちろん、その空

間は狭いが今の小学校1年生レベルの体ならなんとかそこまで進んでいけた。そして、ライトで照らしてみた。

コナン
「何かの筒かな？」

コナンが目にしたのは、柱に縄でくくりつけられた金属の筒のような物であった。その縄を解き、柱から外す。持ってみると重さはほとんどなく、揺らすとカサコソ音がする。紙か何かが入っているようだ。
ふたを開けて見てみると、案の定、折りたたまれた紙切れが出てきた。

コナン
「これは？」

取り敢えず外に出て、その中身を見てみた。

コナン
「何だこれ！？」

そこには、4桁の数字が羅列されていた。

コナン
「もしかして、暗号か？」

その考えが浮かぶと、自然と彼の中の探偵の血がざわめきだす感じがした。黒の組織との最後の戦いから2週間経つが、なんと、彼はその間一件も事件に遭遇していない。それはそれで結構なことなのだが、今までの月日を考えると、退屈だったのも事実だ。だか

ら、今や事件や謎ほど彼が求めているものはなかった。

コナン
「よし、俺がこの暗号を解いてやるぜ。」

とそこで、探偵団バッジに通信が入る。

コナン
「はい、コナン。」

蘭
「新一、あなた今何しているの？」

蘭の声だ。

コナン
「え、やべ！！」

すっかりかくれんぼの事を忘れていた。

コナン
「ごめん、考え事してて。」

蘭
「まったく、どうせそんな事だと思った。さっさと始めなさい。皆待ちくたびれてるわよ。」

コナン
「わーってるよ。」

彼は紙切れを折ってポケットにしまうと、５分遅れでかくれんぼを始めた。

これが、全ての始まりであった。

発見（後書き）

この作品は前作の続きです。時系列的にはＢＲＥＡＫＤＯＷＮと短編の間の作品です。登場人物もＢＲＥＡＫＤＯＷＮと同じです。

始動（前書き）

この話では、前作と違い作者は新一を全てコナンと書いています。
そこの所ご了承下さい。

始動

１９４４年　東京某所

二人の男が話し合っていた。

？

「は？地下要塞の建設ですか？」

？

「要塞とまではいかんが、この研究所を地下に移動させようと思っている。マリアナが陥落し、本土空襲は時間の問題だ。既に大本営も長野の松代への移動準備を始めている。我々もそれに習うのだ。」

？

「わかりました。それで建設予定地はどこですか？」

？

「多摩を第一候補へ挙げたが、本土決戦用の陣地建設の予定が出たので却下だ。かわりに想定しているのが、ここだ。」

男は、棒で地図の一点を指し示した。そこには＜米花＞と書かれていた。

２００７年　工藤邸

コナンはかくれんぼを終わらせ、家に帰ると早速自室に籠もり、暗号の解読にかかった。ちなみに、一人一人丁寧に探したにもかかわらず、たった15分で終わらせた（つまり全員みつけた）のだから恐れ入る。あまりにも手際がよかったので、平次が「お前、追跡メガネ使ってズルしたんとちゃうか？」と言ったが、じっさいコナンは真面目にやった。律儀な事だ。

閑話休題。

コナンは持ってきた紙をもう一度見直す。その紙には4桁の数字が40個ほど書かれていた。まずこれがどんな暗号かを考えねばならない。

と、そこで彼はあることに気づいた。

コナン
「おい服部、入ってこいよ。」

平次
「なんや、ばれとったんか？」

扉をあけて平次が入ってくる。どうやら聞き耳を立てていたらしい。

コナン
「ああ、一緒に2週間もいるとだいたい気配でわかるよ。それと、快斗も降りてこいよ。」

快斗
「何だよ、こっちもばれてたのか。」

そう言って、屋根裏から快斗がベッドの上に飛び降りた。

快斗
「よっと。」

コナン
「ったく、おめえらもう少しまともな登場の仕方できねえのかよ？」

あまりに尋常でない二人の登場の仕方にコナンは悪態をつく。まあ彼らに普通の登場を期待してはいけないかもしれない。

平次
「しゃーないやろ、まともにはいったら工藤はその暗号を隠そうするやろからな。」

快斗
「そうそう、隠し事はなしだぜ新一。」

ちなみに、コナンの呼び方はややこしい。正体を知っている蘭や平次、快斗、そして会ったときから本名を教えられた青子は新一（青子は君付け）、もしくは工藤と呼ぶ。しかし、探偵団の面々や和葉は使い慣れたコナンの名で呼ぶ。偽名を長く使っていた結果といえよう。

コナン
「なんだ、こっちもばれてたのか。」

コナンは一人で解きたかったから暗号のことを隠していたのだ。

しかし、それは二人には通じなかったらしい。

快斗

「俺達だってお前と2週間同居しているわけだぜ。お前のことはだいたいわかるようになって来た。」

平次

「そういうこっちゃ。さあ工藤、俺らにも見せてくれや。」

しぶしぶ新一は二人に紙を差し出した。それとついでに見つけた経緯も話す。二人はしばらくそれをじっと見ていた。

平次

「おい黒羽、おまえ怪盗キッドやろ、何かわかるか?」

平次が快斗に聞いてみる。

快斗

「多分、乱数暗号じゃないかな。」

コナン

「乱数暗号って、数字を組み合わせて作るやつだろ。昔軍隊なんかで使われた。」

コナンの言う乱数暗号の知識はほぼ当たっていた。乱数暗号は、もっとも簡単なもので2桁で、それぞれの数字に意味を付す物で、解読には通常乱数表を用いる。第二次大戦中日本軍が良く使ったものだ。

コナン

「けど快斗。そうなると４桁は難易度がかなり高いぜ、乱数表無しで解けるのか？」

快斗

「大丈夫、こいつは言ってみれば数字のパズルだ。高度な計算システムを持つコンピューターを使えばすぐに解けるはずだ。」

平次

「おおさすが、元怪盗キッド。」

平次が賞賛とも皮肉とも言える言葉を言った。

快斗

「まだ元と決まったわけじゃねえよ。とにかく、これなら俺のもってきたノートパソコンでも出来ると思うぜ。」

コナン

「よし、じゃあ快斗解読頼むぜ。」

快斗

「任せとけ。」

こうして、彼らは行動に移った。

始動（後書き）

意見感想お待ちしています。

解読

１９４４年８月

？

「資材は近くを走っている省線の米花線と、東都電鉄から運び込もう。」

？

「わかりました。」

？

「それと、急遽飛行場の増設も決まった。本土防空戦隊用に作って欲しいそうだ。もっとも、時間も無いから不時着場程度でいいとのことだ。」

？

「わかりました。労働力は中国人、朝鮮人労働者に、学童挺身隊を使う事になっています。これだけあれば、何とかなるでしょう。」

？

「よろしい。完成期日は来年の９月２日だ。どうかかんばって欲しい。」

？

「はい。」

２００７年　工藤邸

コナン達が暗号解読に入った頃、１回のキッチンでは、蘭、和葉、青子、哀の４人組が夕食を作っていた。

蘭
「うーん・・・」
蘭が料理を作りながらそう呟いた。

和葉
「どうしたん、蘭ちゃん？」
和葉がたずねる。

蘭
「あ、ゴメン。実はね新一のことなんだけどね。」

和葉
「コナン君がどうしたん？」

蘭
「いや、なんかちょっと今日様子が変だなあと思って。」
さすが蘭。コナンのわずかな様子の変化に気づいていたらしい。

蘭
「また新一が変な事件に首をつっこむんじゃないか心配なの。」
そこで、青子が会話に加わる。

青子
「あ、蘭ちゃん青子もその気持ち分かる。青子も快斗が怪盗キッドってわかってから、いつも心配していたの。もしかして失敗して捕まったり、大きな怪我でもするんじゃないかって。」

青子が蘭に同情する。

和葉
「けど、心配するだけじゃだめんとちゃう。」

和葉が注意を促す。

哀
「私もそう思うわ。彼は今までに色々危ないことに首突っ込んでいたから。」

そう言うのは、自身も経験者の哀だ。ちなみに、哀は昼は薬の研究に没頭しているが、この夕食作りだけは3人と一緒にする。彼女にとっては良い気晴らしといえるからだ。

蘭
「じゃあ哀ちゃんはどうしたら良いと思う？」

哀
「ここは鎌をかけるべきね。」

3人
「「「鎌！？」」」

3人がハモッテ言った。

一方、そのころコナン達はというと。

コナン
「ヘックション！！」

コナンが大きなくしゃみをした。

平次
「どうしたん、工藤？」

コナン
「いや、誰かが噂してるのかも。」

平次
「となると、多分姉ちゃんやな。もしかしたら工藤が暗号見つけたのにきいついたんかも。」

コナン
「ええ！！」

平次も鋭い。大正解である。

コナン
「それはちょっとやばいかも。」

蘭の事だ、危険な事に首突っ込むなと言ってくるかもしれない。そうなると、今回の暗号を解くことが出来なくなるかもしれない。それはゆゆしい事態である。

コナンに不安の要素が増えたその時、自室に行っていた快斗が入ってきた。

快斗
「暗号が解けたぜ。」

どうやら暗号が解けたようだ。

平次
「おお。さすが元怪盗キッド。」

また平次が賞賛とも皮肉ともつかない台詞を言う。

快斗
「だから・・・まあいいや。」

快斗も突っ込む気力はもうないらしい。

コナン
「ったく、そんなことしてねえで、さっさと内容教えろよ。」

コナンが快斗をせかす。

快斗
「ああ。やっぱりこの暗号は乱数暗号だった。で、結果はこうなった。」

イ・リ・グ・チ・ハ・ホ・コ・ラ・ヨ・リ・ジュ・ウ・ド・フ・タ・マ・ル・マ・ル・メ・イ・ト・ル・チ・テ・ン・ニ・ア・リ

快斗
「で、直すとこうなる。」

入り口は祠より十度、２００m地点にあり。

平次
「入り口？なんの入り口やろ？」

快斗
「さあな、そこまでは書いてなかった。だから行ってみねえとわかんねえぜ。」

コナン
「祠から１０度ってことは、北を０度にして計るんだろ。」

快斗の言葉に、コナンは地図を用意する。

コナン
「あの、祠がここ。で、そこから１０度で２００mとなると・・・・」

分度器と定規で位置を測定する。

平次
「あの竹林の中やな。よっしゃ、明日早速探しに行って見ようや。」

平次が言い出した。それに快斗も同調する。

快斗
「そうだな。なら準備しねえと。新一もいいよな。」

コナン
「ああ、明日は土曜日だ。学校もねえし。予定も入ってないしな。」

平次
「よっしゃ、決まりやな。」

こうして、3人は計画を立て始めた。しかし、彼らは予想していなかった。すでに蘭たちが感づき、罠を張っている事を。

省線・・・・・ＪＲの前身である、国鉄のさらに前身の組織です。当時の鉄道省管理下にあった鉄道の事です。

解説（後書き）

今年のＵＰはこれで最後です。さあ動き始めたコナンたち。しかしそれに蘭たちはどうするのか？また冒頭の会話はどのように影響するのか、次回乞うご期待。

意見感想アドバイスお待ちしています。

疑惑

１９４４年１２月

「三宅島電探（レーダー）基地より報告、敵Ｂ２９重爆約７０機、帝都に向かいつつあり、空襲警報発令。」

スピーカーから、警報発令を合図するけたたましいサイレンが鳴り響く。

「対空砲中隊は全員配置につけ。」

対空砲に兵士たちが取り付き、砲身が上げられ、弾が装填される。

「撃ち方始め！！」

一斉に対空砲が火を噴き、辺りは硝煙と爆音に満たされた。

２００７年　工藤邸

男性陣と女性陣がそれぞれの思惑を抱えたまま、夕食の時間となった。この時こそ、蘭たちの罠が弾ける時であった。

それまで、他愛もない会話が行われていたが、コナンの隣にいた

蘭がある話を切り出した。

蘭

「そういえば新一。」

コナン

「あん？」

蘭

「明日園子に和葉ちゃん、青子ちゃんといっしょにトロピカルランドに出かけようと思っているんだけど。新一もついてこない？」

例によって女子グループでお出かけで、それへのお誘いらしい。しかし、コナンはふと思う事があった。

コナン

「え？そんなこと言ってたっけ？」

随分急な話だなと思ったのだ。しかも、土曜日で部活があるかもしれない園子まで呼び出して。

蘭

「さっきみんなで決めたのよ。明日どうせ予定ないんだし、どこか出かけようって。別に新一も不都合はないんでしょ？」

そう言われて、コナンの脳裏にさっきの平次の言葉が浮かぶ。

＜こいつ、やっぱり感づいていたのか。とにかく俺が何かしら事件に首を突っ込もうとするのを嫌がるようになったからな。妨害行動に出たわけか。＞

蘭
「平次君もついて来てくれるよね？」
平次
「え！！」
突然の蘭の指名に慌てる平次。
和葉
「ええやん、暇なんやろ。」
和葉もすかさず言う。さらに。
青子
「快斗も行くわよね？」
快斗
「！？」
青子が快斗に問いかける。まさか、彼もきっぱり断るわけにはいかない。
＜こいつらグルだ。＞
コナンはその事実に気づいた。
＜そして3人に入れ知恵したのは恐らく。＞
その人物は、一人静かに食事していた。ただ、コナンの視線が向

いた瞬間、口元が少し緩んだように見えた。

＜やろう。＞

だが、いくら彼が彼女に悪態をつこうが、それで解決するわけではない。しかし、もしここで予定があるから嫌だと言えば、その予定についてとことん追求してくるだろう。仮に、日曜日に延期し、明日蘭たちについて行っても、蘭たちは執拗に妨害してくるだろう。

＜さて、どうしたものか。＞

しばしの沈黙。だが、快斗が意外な返事をした。

快斗

「わかった。いいぜ。ついて行くよ。」

コナン・平次

「「え！！」」

コナンと平次が驚きの声を上げた。

快斗

「別にいいよな、新一、平次。」

結局、コナンも平次も同調した。その後、細かい打ち合わせをして、夕食を食べ終わらせた3人はコナンの部屋へ戻った。

部屋に戻ると、新一と平次が快斗に不満の言葉を言った。

コナン
「快斗、あんなに簡単にあきらめていいのかよ。多分蘭たちは執拗に探ってくるぜ。」

平次
「そうや、そうや。」

そんな二人に対し、快斗は不敵な笑みをした。

快斗
「誰があきらめたって言った。明日は予定通り、入り口探しに行くぜ。」

「「え！！」」

じゃあさっきの返事の意味はなんなのだ。

快斗
「青子達には悪いが、強硬手段を取ってやるぜ。」

コナン・平次
「「きょ、強硬手段！！」」

そのことろ、女性陣は後片付けをしていた。

青子

「とりあえず、明日は大丈夫みたいね。」

蘭

「けど新一の事よ、絶対に諦めないはずだわ。」

哀

「そうね、彼の事件への執着心は尋常で無いから、気をつけたほうがいいわ。」

哀がさらりと言う。ただ、その声になんとなくこの状況を楽しんでいる感覚が見え隠れしている。

和葉

「けど蘭ちゃんはそんだけ新一君のことが心配なんやね。」

青子

「本当に熱々ね。」

和葉と青子がはやしたてる。

蘭

「え、ええと。もう二人ともやめてよ。」

彼女らはそうやって盛り上がっていたが、それが仇となってしまった。彼女らはそれが転がってきた事に全く気づかなかった。

しばらくして、段々彼女らの動きがおかしくなってきた。目に見えて動きが遅くなってきたのだ。

蘭

「あ、あれ、変だな。体が重いような。」

そう言った途端、和葉と青子が倒れた。

蘭

「和葉ちゃん、青子ちゃん！」

蘭が二人によろうとしたが、彼女も限界だった。

蘭

「あ、だめ。」

ついに蘭も倒れた。一人、哀だけがなんとか立っていたが。しかし、それはただ立っているに過ぎなかった。

しばらくして、3人の人影が現れた。その3人はガスマスクを被っていて、倒れて、かわいい寝息を立てている彼女らを背中に乗せると、2階のそれぞれのベッドルームへ運んでいった。

そして、哀も含め運び終わると、彼らはマスクを脱いだ。

コナン

「あのさ、こんなことして本当に良かったのかな？」

平次

「俺もなんとなくそう思うわ。」

後悔を含む言葉を発したのはコナンと平次だ。

快斗

「仕方ないって、こうでもしなきゃ、あの暗号の謎は永遠に解けなかったぜ。」

実は、先ほど彼女らの下に転がってきたのは、快斗が持っていた催眠ガスであった。

快斗

「しかし、寺井のじいさんもいい仕事してくれたぜ。」

このガス、寺井さんが開発した新型で、無色・無臭。おまけに缶から外に出る音もしない優れものであった。

コナン

「けど、やっぱりな・・・」

コナンはまだ釈然としないようだ。

快斗

「なあに、この埋め合わせはいくらでもしてやるさ。さ、明日の準備しようぜ。」

平次

「そうやな。おい、工藤。後は突き進むしかないんや、準備しようや。」

コナン

「あ、ああ。」

コナンは、後で実力制裁されないかという不安を抱えながら、翌日の準備に入ったのであった。

疑惑（後書き）

例によってですが、御意見・御感想おまちしています。

進入

１９４５年２月

「工事の進捗状況は？」

「５割という所です。」

「早いな。」

「地下での工事ですから、空襲警報も気にしなくて良いから助かります。」

「それは結構な事だ。戦局は激しさを増している。硫黄島にも敵が上陸した。沖縄も危ない。ソ連だっていつ攻めてくるかわからん。もしかしたら９月でも間に合わんかもしれん。完成を急ぐんだ。」

「わかっています。」

２００７年

快斗

「新一、準備できたか？」

コナン

「ああ。」

平次
「よっしゃ、いくで。」

朝になり、3人とも出発する。それぞれ、最低限必要な物をリュックに入れ、動きやすい格好をしている。

快斗
「さ、一体どんな謎か待っているのやら。」

平次
「楽しみやわ。」

快斗と平次は期待に胸を膨らませていた。一人、コナンだけは浮かない顔をしていた。

平次
「どうしたんや、工藤。まだ昨日こと気にしとるんか？」

平次は、コナンが浮かない顔をしているのは、昨日夜の、蘭たちを眠らせた事にあると思っているようだ。しかし。

コナン
「いや、別に。」

コナンの返事はその一言だけであった。

快斗
「変な奴。」

実際のところ、コナンが感じていたのは、不安であった。どこから来ているかはわからない。ただ、漠然と浮かんでくるのだ。

＜なんだ、この感じ？＞

自問自答を繰り返すがわからない。ただ、危険に遭うとか、そんな物を予感させるものではなかった。いままでにないものにであいそうな。そんな感じであった。

とにかく、３人は雷神社目指して出発した。

雷神社　祠前

平次

「よっしゃ、まずここから１０度やな。」

平次と快斗が地図と方位磁石、それに分度器をを使って、北とそこから１０度の位置を割り出す。

快斗

「あっちだ。」

位置を割り出すと、３人はそこへ向かって歩き始めた。

快斗

「この辺りがだいたい祠から２００ｍじゃないかな。」

しばらく歩いたところで、快斗が言った。前日、地図で確認した通り、そこは竹林の中であった。当たり前のことだが、周りには竹しかない。

コナン
「竹しかないよな。」

快斗
「いや、新一。もしかしたら隠されてるかもしれねえぜ。」

コナン
「それくらい考えてるよ。」

情景への感想を漏らしただけなのに、それを真剣に取られてコナンは少しいらだった。その場を平次がおさめた。

平次
「とにかく、探そうや。」

その言葉を合図に、その後2時間ほどにわたって、3人は辺りの竹林を入念に探してみた。しかし、何かの入り口どころか、何も変わった物は見つからない。

快斗
「おかしいな、何も見つからねえ。」

平次
「もしかして、がせねたとちゃうんか？それとも計算が間違ったんとちゃうか？」

快斗
「そんなはずはねえ、計算に間違いはなかったはずだ。」
平次と快斗に焦りの色が見え始めた。焦りは推理の最大の敵である。

コナン
「だったら、もう一度地図を見てみようぜ。」

平次・快斗
「ああ。」

コナンの提案で、もう一度地図を見直すこととなった。

3人は一箇所に集まり、地図を見ようとした。その瞬間であった。突然、彼らの足元の感覚がなくなった。けっして無重力になったわけではない。地面が消えたのだ。分かり易く言えば地面に穴が開いたのだ。

3人
「「「!!??」」」

叫ぶ暇もないまま、3人はその穴に落ちてしまった。そして、3人が落ちた直後、穴は再びふさがってしまった。これは後に分かった事であるが、実は3人が立っていた場所には、簡易式の計量装置があって、一定の重さになると、そこに穴が開くようになっていたのだ。偶然にもその重さに、3人の体重と荷物の合計が一致したのであった。

そんなことも露知らず、3人は落ちって言った。いや、どっちか

というと中は滑り台のようになっていて、滑っていったというほうが正しい。

そして、しばらくして、3人は終点についた。もちろん、3人が一緒に落ちたのだから、3人は絡まりあっていた。

快斗
「いってえ！」

平次
「何がおきたんや？」

コナン
「どうやら、地面が抜けたらしい。」

上から快斗、平次、コナンの台詞である。とにかく、3人とも体を起こす。

快斗
「もしかして入り口ってこれのことなのか、新一？」

コナン
「多分な。」

平次
「それにしても、真っ暗でなにも見えへんわ。」

洞窟か何かの中なのか、辺りは真っ暗で何も見えない。

コナン

「お前たちも博士から腕時計貰ってるだろ、そのライトをつけろよ。」

コナンに言われ、2人はそれぞれの腕時計のライトをつける。ちなみに、2週間前の事件で、コナンは改良型の腕時計をもらっている。他の2人は、旧型の腕時計と探偵団バッジをもらっている。

ライトがついた途端、彼らは叫んだ。

3人

「「な、何だここは!?」」

彼らが見たものとは一体?

進入（後書き）

改良型腕時計・・・・以前のものに、麻酔針が連発可能にしたもの。ちなみに最大で5本仕込める。

硫黄島への上陸・・・・昭和２０年2月１９日に東京から１２５０ｋｍ離れた硫黄島に米軍が上陸したこと。詳しくは硫黄島からの手紙を見ると良いです。

意見、感想お待ちしています。

番外　上

２００７年

「・・・・・さんと・・・・・・がさ、・・・・・だって。」

「何！？」

「そんな馬鹿な！！・・・はともかく、・・・・さんもだと！！」

「う、嘘だあああああ！！！！！」

「俺は信じないぞ！！」

さて、少しここで本編とはそれるが、ある二人の人物の近況について説明させていただく。その二人の人物とは、皆さんおなじみの佐藤、高木両刑事だ。

この二人、二週間前の組織との戦いでは、黒の組織の日本支部への捜査や、新一達との連絡係りを務めたが、ジンたちが警視庁に攻めた時は、出動していていなかった。ただ、スネイク達の逮捕や、爆弾解体のとき最後まで現場に残り、解体を成功へ導いた（解体の功績はコナンたちの正体をごまかすため、表向き警視庁のものにな

った）などの功績を建てていた。

警視庁で銃撃戦が起きた3日後、銃撃によって破壊された正面玄関の後片付けと、一部切断した屋内の回線の復旧が完了したため、暫定処置として所轄の警察署に疎開し業務を行っていた一課の面々も警視庁本庁舎に戻ってきていた。

佐藤、高木両刑事はこの前日に目暮警部の計らいで一日休みを貰っていた。その二人、この日はそろって出勤してきた。

佐藤
「おはよう高木君。」

高木
「あ、おはようございます佐藤さん。」

2日ぶりの顔合わせである。

佐藤
「本当に今回の事件は色々あったわね。」

高木
「ええ、まさか警視庁で銃撃戦が起きるなんて。しかも、殉職者があんなに。」

佐藤
「今日はその人たちの二階級特進が発表されるらしいわね・・・・けどそれで失われた命が戻ってくるわけじゃない。遺族はやりきれないでしょうね。」

高木
「佐藤さん。」

父親が殉職した佐藤刑事にとっては、今回の事件の遺族に同情の念が絶えないのだろう。

佐藤
「あ、ごめん。暗い話しちゃって、さ、行きましょう。」

2人はこうしてこの日登庁した。

午前は丸々、今回の事件での殉職者に対する慰霊式典が行われ、殉職者の名前が読み上げられ、二階級特進が発表された。

その日の午後、二人のもとに警官が一人やって来た。

警官
「佐藤、高木両刑事は至急松本警視の部屋に来て欲しいそうです。」

その警官はそれだけ言うと、さっさと去っていった。

佐藤
「何かしら？」

高木
「さあ？とにかく行ってみましょう。」

そして二人は松本警視の部屋へと向かった。

佐藤
「佐藤警部補、高木巡査部長、入ります。」
扉を開けると、あの強面の松本警視が机に座って待っていた。いや、それともう一人。
高木
「あれ、目暮警部、どうしたんですか？」
二人の上司である目暮警部が松本警視の机の傍に立っていた。
目暮
「・・・・」
高木の言葉に、目暮は沈黙したままであった。その並々ならぬ状況に、二人は事態の重さに気づいた。
松本
「佐藤、高木。」
松本警視が口を開いた。
松本
「これから言う事は他言無用、そして質問も一切受け付けんからな。」
その言葉に、二人は緊張する。なにか処分でも下されるのか？
松本
「まず佐藤。」

佐藤
「はい。」

松本
「明日付けを持って一階級昇進だ。つまり警部へ昇進だ。」

その言葉の意味を、最初彼女は理解できなかった。処分か何かと思ったのに、昇進であった。これは嬉しいことであった。だが、つづく言葉にその思いは崩壊する。

松本
「そして、同時に警視庁捜査一課付きの任を解き、警視庁管内、米花署刑事課課長へと異動するものとする。」

佐藤
「え！！」

突然の異動命令である。

さて、佐藤刑事が何故驚くのか。それは異動する場所にあった。警官にとって、警視庁の勤務は花形といってよい。それ以外の警察署は所轄署と呼ばれ、立場的には一段低い。通常、警視庁の刑事は、素質ありとして所轄から引き抜かれる。だから、そうそうなれるものでない。つまりたとえ課長職を貰っても、所轄署にいく限り、左遷もしくは降格といっても差し支えなかったのだ。

番外　上（後書き）

今回の話は上下編です。下編投稿までしばしお待ちを。

番外　下

佐藤
「り、理由を教えてください。納得できませんそんなの。」
理不尽な転勤命令を聞かされて佐藤刑事は黙っていなかった。理由を聞こうと松本警視につめよる。しかし。

松本
「質問は受け付けないと言った筈だ。」
確かに、部屋に入った途端そういわれた。

松本
「お前については以上だ。次、高木巡査部長。」
こうして佐藤刑事の抵抗は空しく終わった。

高木
「は、はい。」
呼ばれた高木刑事は緊張していた。まさか自分もという予感がしたのだ。そしてそれは的中してしまった。

松本
「佐藤と同じく、一階級特進のうえ警視庁捜査一課付き刑事の任を解き、警視庁管内米花警察署刑事課、強行犯係係長に任命とする。」

やはり左遷であった。

高木
「あ、あのそれでやっぱり。」

松本
「もちろん、意見はなしだ。話はこれで終わりだ。もどって転勤の準備に入るように。目暮、後は頼む。」

結局、反論も出来ず、理由さえ聞けぬまま、2人は目暮警部と共に退室した。

佐藤
「どうして私達が左遷なのよ。」

高木
「まあまあ佐藤さん、落ち着いて。」

部屋を出るなり、愚痴を言う佐藤刑事を高木刑事がなだめる。

佐藤
「なによ、高木君は悔しくないわけ?」

高木
「そういわれても、上の決めたことですから。」

そう、警察は縦社会、上官には逆らえない。

佐藤

「そうだけど、納得いかないわよこんなの。」

目暮

「すまない、二人とも。」

いきなり口を開いた目暮警部。

佐藤・高木

「「え！！」」

目暮

「松本警視も頑張ったんだが。」

佐藤・高木

「「どういうことです？？」」

目暮

「実はな・・・・」

目暮警部の言うことによると、今回の黒の組織の事件では、様々な真実が発覚したが、その中で警察上層部を震撼させたのが、黒の組織の存在に警察が全く気づいていなかった事である。もちろんこれは組織側の工作がとてつもなく高度な事であったからだが、しかし万が一国民にこのことが漏れては（黒の組織については警視庁は右翼過激派と発表した）警察への批判の火種となる可能性があった。しかも、今回の事件では自衛隊まで出動してしまい、最終的に警視庁に進入した賊を掃討したのは彼らである。これでは面子丸つぶれである。

目暮

「だから、今上層部が恐れているのは今回の事件に関する真実が漏れる事だ。彼らにとって、君達のように今回の事件に深くかかわった者が、記者も出入りする警視庁にいるのは危険と判断されたんだ。」

だから左遷されるようである。

高木
「けど、それって事実上口封じじゃないですか！？」

高木刑事がもっともな事を言う。

目暮
「そう受け取られても反論は出来ん。」

佐藤
「じゃあ、私達は上の人たちの保身と、自己満足のために警視庁から追放されるんですか！？」

目暮
「君達だけではないぞ。私も警視に昇進だが、神奈川県警に転勤だ。」

佐藤
「え？そんな・・・・警部まで。許せない。私松本警視に文句言ってきます。」

目暮
「だめだ佐藤君。」

今にも怒鳴り込みかねない佐藤刑事を、目暮警部が止める。

目暮

「今回の決定は松本警視より上位の人間が決めたんだ。どうにもならんよ、それに警視は最後まで我々が警視庁に残れるようがんばったんだ。それに、ほとぼりが冷めたら警視庁に戻れるよう尽力してくれるそうだ。とにかく今は警視を信じて、耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶしかない。」

そこまで、言われ佐藤刑事も黙ってしまった。

高木

「佐藤さん。警部の言ったように、今は警視を信じましょう。」

佐藤

「・・・・・・・・わかったわ。」

ずっと後の事になるが、佐藤、高木両刑事は当初別々の署に転属されそうになった。しかし、二人の仲を知った松本警視が一緒になるよう奔走してくれたそうだ。

約2週間後

佐藤

「暇ねえ。」

佐藤警部が課長席で愚痴を言う。

こうして転勤した彼女であったが、とにかく前向きに行こうと心を切り替え来てみれば、事件も起きない毎日であった。その他の外回りも部下の仕事である。課長である彼女はただひたすら毎日書類とにらめっこである。今まで一課で辣腕を振るっていた彼女にとってこの状態は耐え難い。

高木

「まあまあ佐藤さん。事件がないのは良いことですよ。」

なだめる高木警部補。しかし、彼の言葉もどこか説得力に欠ける感じがする。やっぱり彼も、暇をもてあまし気味なのだ。

佐藤

「けど何もないのもねえ。何か面白い事起きないかしら。」

そう言った時、携帯が鳴った。

佐藤

「あら？蘭さんからだ。何かしら？もしもし。」

こうして、物語は本編に分岐する。

番外　下（後書き）

というわけで、今後は本編に佐藤、高木両刑事が登場します。
次回は本編に戻ります。蘭たちが登場します。

御意見・感想おまちしています。

追跡

１９４５年７月

「日本が降伏するらしいぜ。」

「まさか、デマだろ！」

「けど、実際上層部じゃ連合国との交渉が進んでいるとか。」

「けど、じゃあここはどうなるんだ？」

「さあ？」

２００７年

「まんまと新一にやられたわ。」

蘭がぼやく。昨日の夜眠らされた彼女は正午過ぎになってようやく薬が切れて目覚めた。その後、まだ眠っていた三人を起こし、今は一階の居間に集まっていた。

「まさか彼がここまでするなんて私も予想できなかったわ。」

哀が言うが、そもそも彼らがこのような行動を取ったのは彼女が蘭たちに入れ知恵したからなのだが。

「けど、平次もコナン君に協力するなんて。」

「快斗もいっしょだったなんて。もう。」

和葉と青子が嘆くが、新一が真犯人と思っているのが問題であろう。なにせ今回彼女らをはめたのは誰であろう快斗なのだから。

「絶対に許さない。必ず見つけ出す。」

と蘭は意気込むが。いかに彼女が叫び、暴れようともその新一本人がどこへ行ったのかわからないのでは話にならない。

「けどなんで僕達を巻き込むかな？」

そう不満たらたらに言うのは、彼女らに呼ばれてやってきた高木警部補である。もちろん佐藤警部も一緒である。

「あら、別にいいじゃない。どうせ今日の午後は非番だったし。それに新一君たちが相手なら良い訓練になるじゃない。」

と佐藤警部に言われては彼に反論する余地はない。というか女ばかりの状況なのでめったなことはできない。

＜うらむよ工藤君＞

と心の中でコナンを呪う高木警部補であった。

「で、蘭さん。工藤君たちがどこへ行ったか心当たりはないの？」

「それが分からないんです。昨日の夕方から態度がおかしいのは

分かったんですけど。それ以外は全く。」

確かに、蘭たちはコナンたちの暗号について詳しいことはわかっていなかった。聞き出す前に彼らは出かけてしまったのだ。

そこで、突如青子が何かを思い出す。

「あ！！」

「どうしたん、青子ちゃん。」

「私変な紙切れ見つけたんだった。」

と言って、ポケットから紙切れを差し出す。そこには、４桁の数字が。実は快斗が書いた暗号のコピーであった。

「暗号みたいね。」

「じゃあこの暗号を解けば。」

「けど高木君どんな暗号なのか分からないわよ。」

その後、彼らが暗号に関する本を調べてそれが乱数暗号と気づくのに１時間。さらに解くのに３０分かけることとなる。

一方、コナンたちはというと。

「一体ここはなんだ？」

3人が見たものは巨大な洞窟であった。しかも、相当奥行きがありそうだ。

「さあ、とにかくなんとかしてここをでないと。もし落盤とかが起きたら大変だ。」

そういうコナンの提案で、取り敢えず出口を探すこととなった。

「けど、今入ってきたところから上がるのは無理とちゃうか？」

平次の言うとおり、とても登れそうになかった。

「危険だけど進むしかないみたいだな。」

快斗が時計型ライトで洞窟の奥のほうを照らす。見た限りかなりの長さだ。ちなみに、これは阿笠博士の発明品で、おなじみのアイテムだ。快斗と平次ももらっていたのだ。

「「ああ。」」

こういうわけで、3人は奥に向かって歩き始めた。

3分ほど歩いた所で、平次が叫んだ。

「なんや、これ？」

慌ててコナンと快斗もそちらに目を向ける。

ライトで照らすと、そこには、長い棒状のようなものがあった。だが、3人にはすぐにそれがなんであるかわかった。

「「「ライフルだ！！！」」」

すぐに3人が近づく。何か事件かもしれない。しかし、手に取ったコナンにはそうでない事が分かる。

「こいつは大分昔のだ。誇りをかぶっているし、それに銃床が木製でボトルアクション式だ。おまけに所々赤錆びてる。それにしても、随分でかいな。」

コナンは何か手がかりはないかとその銃の上部をこすってみた。そして。

「これは！！」

平次たちも覗き込んだ。

埃の下から出てきたのは、菊の紋章と三十八式という文字であった。

追跡（後書き）

探索

１９４５年７月

「入れろ、入れてくれ！」

「ダメだダメだ！ここは軍の施設だ。地方人は他へ回れ！」

「俺たちに焼け死ねって言うのか！？」

「そうは言ってない、別の場所へ行けと言っているだけだ。」

ヒューン！！

「焼夷弾だ！！」

ボワ！！

「ギャアア！！！！」

地方人・・・・旧陸軍で民間人を指して言った言葉。

２００７年

「やっと解けたわ。答えはこうね。入り口の位置は祠の南２００ｍにあり。」

蘭たちはようやく暗号を解いた。

「祠？どこの祠かしら？」

佐藤警部が首をかしげる。祠なんか結構な数がある。

「多分昨日行った、雷神社ちゃうん。」

和葉が言った。大正解である。

「雷神社！」

高木刑事が驚いた。

「もう、なによ高木君。いきなり大きな声を上げて。」

「ああ、すいません。実はその神社について、生活安全課の巡査から聞いた話があって。」

「何を聞いたのよ？」

「ええ、実は・・・・」

高木刑事の話はこうである。数年前、雷神社のある山へ、荷台いっぱいにドラム缶を積んだトラックが数回目撃されたという。不思議な事に、そのトラックの荷台は、帰り走ってくる時は空であったという。

トラックが走っていった先には何も無いはず。住民が怪しく思って警察に通報した頃、そのトラックはこなくなったという。

「そのトラックは何を運んでいたんですか？」

青子が聞いてみる。しかし、高木刑事の返答は。

「さあ？」

の一言であった。

「まあそのトラックの話は置いといて。とにかく、新一達は雷神社に行ったはずだわ。追うわよ。」

蘭が立ち上がる。

「だったら私が車を出すわ。」

佐藤警部が提案する。

「ありがとうございます、佐藤警部。ふふふ、新一待ってなさい。ふふふふ・・・・」

蘭が不吉な笑みを浮かべながら笑う。その場にいた全員が、コナンの運命を悟った。

「「「「「コナン（新一）君、ご愁傷様」」」」」

全員の頭の中には、蘭にぶっとばされるコナン（新一）の映像が

映っていた。とにかく、こうして蘭たちはコナンたちの追跡に入ったのであった。

一方、その追われるコナン達はどうしていたのであろうか。

「とにかく、これでここがなんの施設かはだいたいわかったな。」

「ああ、こいつは確か三八（さんぱち）式歩兵銃。旧日本軍の銃だ。」

新一の言ったとおり、それは旧日本軍が明治３８年に正式採用し、終戦まで使った三八式小銃であった。

そして、コナンは取り敢えず銃を置いた。全長が１，７ｍ、重さ４ｋｇもある銃を７歳レベルの体で持っているのはきつい。

「じゃあここは昔の軍の施設ちゅうことか？」

「多分な。」

平次の言葉に対し、快斗が断言する。しかし。

「けどおかしいな。」

コナンが腑に落ちない顔をする。

「何がおかしいんや？工藤。」

「いや、昔小学校で郷土史を習った時、戦争中の暮らしについて

勉強したことがあったんだけど、米花町にこんな大規模な地下壕を作ったなんて聞いてねえぞ。」

「本当か、新一。」

「ああ、米花町にあったのは確か海軍の飛行場だけだ。けどその飛行場があったのはここから結構離れた場所だ。」

「じゃあここはなんなんや？」

「それが分かれば苦労しねえよ。」

もっともだ。

「とにかく、新一に平次。ここが何かを調べるよりも、どうやって脱出するか考える方が先決だぜ。」

快斗言うとおり、早く脱出しないと彼らは大変な事となる。食料は昼食として作ってきたおにぎりとほんの少しの菓子だけ。飲み物を一人一本のお茶しかないのだ。

「それもそうやな。」

再び、三人は歩き出した。途中でいくつか扉を見つけたが、それは無視して進んだ。だが。

「行き止まりや。」

平次がライトで照らすと、確かに、壁があって完全に道は途切れていた。

「一体どうしたら出られるんだ？」

快斗が投げやりに言う。果たして彼らはここから出られるのか？

探索（後書き）

というわけで、やっと１０話です。今回の話には、多数の伏線があります。皆さんはいくつ見つけれますかな。

前進

１９４５年８月１５日

？

「朝から米艦載機が来襲している。つまり機動部隊が近くにいるのに、どうして出撃命令が出ないんだ？」

？

「茂原の３０４空と、厚木の３０２空は上がったらしいぜ。俺たちも出よう！」

？

「そうだ、そうだ。」

？

「まあ待て。正午から陛下の重大放送がある。それを聞いてから決めよう。」

３０４＝第３０４航空隊　３０２＝第３０２航空隊　陛下＝昭和天皇のこと

２００７年　雷神社近辺

蘭

「いないわね。」

和葉

「ほんまに見つからんわ。」

蘭たち御一行は、取り敢えず新一達の後を追いかけてきたが、しかし雷神社周辺に新一達３人の姿は影も形もなかった。

高木

「本当にどこにいったんだ、新一君たち？」

つき合わされている高木刑事が愚痴をこぼす。しかし、いくら探しても見つかるはずが無かった。なぜなら彼らは今・・・・・

地下で迷っていた。

コナン
「とにかく、なんとか脱出ルート見つけないと。」
平次
「工藤のいう通りや。はよせんと、俺たちのたれ死ぬしかないで。
」
コナンと平次が真剣に言う。しかし。
快斗
「新一も平次も意気込むのは良いけど、じゃあどうするんだ？」
快斗が痛いところを突く。そう、意気込んだは良いが、コナンにも平次にも、具体的な考えは浮かんでいなかった。地下にいるせいで、携帯も探偵団バッジも使えない。つまり孤立無援であった。
そんな中、平次がいきなり言った。
平次
「工藤、黒羽。俺実は言いたい事があったんや。」
2人（平次・コナン）
「「？」」
平次
「お前らは、いいやつやった。」
どうやら、冗談のつもりで言ったらしい。しかし、コナンには冗談として伝わらなかった。ま、確かに洒落にならない話ではある

が。

コナン

「なんだ、そのやったっていう過去形は！？ふざけるな！！」

そして、コナンが平次に掴みかかった。

平次

「うお！？何すんや。」

平次も対抗してコナンに殴りかかった。そこで、さすがにまずいと思った快斗が仲裁に入ろうとした。

快斗

「やめろ、ふた・・・」

快斗はそこまでしか言えなかった。なぜなら、コナンと平次のパンチが顔面に直撃したからだ。

2人（コナン・平次）

「「あ！？」」

コナンと平次はとんでもない事をしてしまったと思った。それは当たった。

快斗

「おめえら、絶対許さねえ！！！！！！」

こうして三つ巴の喧嘩が始まってしまった。

そして、３０分程続いた後。３人ともようやく不毛な争いである事に気づいた。

全員
「「「俺たち何やってたんだ？」」」

自問自答する３人。確かに、あまりに無駄な時間と体力のロスであった。

コナン
「とにかく、仕切りなおして、これからどうするか考えないと。」

平次
「そうやな。」

快斗
「そうだ。」

やっと３人の意見が一致した。

コナン
「けど、本当にどうする？外に連絡しようがないんじゃな。・・・・あ！」

コナンが何かに気づいた。

平次
「なんや工藤？」

コナン
「そういえば、ここまで来る途中にいくつか扉があったよな。」

２人（平次・快斗）
「「あ！！」」

平次も快斗もすっかり忘れていた。

コナン
「あそこのどれかが出口じゃないかな？」

確かに、その可能性は零ではない。

快斗
「善は急げだ、行こうぜ。」

２人（平次・コナン）
「「おう。」」

こうして３人は洞窟を戻り始めた。そして、扉がいくつかある所まで戻ってきた。

扉は全部で６つ。いずれも木で出来ている。しかし、鍵が掛かっているようでノブを回してもビクともしない。

快斗
「とにかく、開けてみないとな。」

コナン
「ようし、俺に任せろ。」
そう言って、コナンはサッカーボールをベルトから射出させる。
そして、キック力増強シューズを全快にする。

コナン
「イッケー！！！」
ボールはすさまじい力で扉を破壊した。扉は外れ、倒れた。

コナン
「よっしゃあ！！」
コナンが得意げに言う。

コナン
「中へ入ってみようぜ。」
2人（平次・快斗）
「「おう。」」
そして、3人は中を見てみる。するとそこには。

全員
「「「何だ、これは！！」」」
彼らは一体何を見たのか？

前進（後書き）

彼らは一体何を見たのか。皆さんの御意見御感想お待ちしています。評価システムは再開していますので、どしどし送ってください。

遭遇

１９４５年８月１５日

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル臣民ニ告ク。朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ。・・・惟フニ今後帝国ノ受クルヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス。ナンジ臣民ノ衷情モ朕善く之ヲ知ル。然レトモ朕ハ時運ノ赴ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。・・・・・・・・・ただ今、陛下の思し召されたとおり、我が国はポツダム宣言を受託し、・・・・・・・」

２００７年

「「「何だこりゃあ？」」」

３人が見たものは、整然と並べられた金属の、先端が円錐形になっていた容器であった。それが上下二列の棚にぎっしりと詰まっていた。

「砲弾見たいやけど。」

平次が言う。確かに、大砲の砲弾のようだ。

「なんでこんな物が残っているんだ？」

快斗がもっともなことを言う。

「あ、なんか書いてあるで。」

平次の言葉に、コナンたちも釣られてそっちを見る。確かに、何か書いてあった。それを快斗が読んでみる。

「えーと。昭和１９年８月、大久野島陸軍工廠製造。」

「じゃあやっぱり兵器に間違いないな。ったく、外に出たら自衛隊に撤去してもらわねえとな。・・・・おっ！？」

コナンがぼやいたそんな時、彼は何かに気づいた。

「どうしたん？」

「何だよ新一？」

二人の声を無視して、コナンはそれに近づいた。二人も続く。

そこには、古ぼけた木製の机があった。コナンはその引き出しに何かないか探してみる。案の定、古い紙の束が出てきた。

「これに何か書いてあるかも。」

コナンはそのノートをめくってみた。

「何て書いてあるんだ、新一。」

「ええと、マスタードガスの使用上の注意について。・・・・・・・・・え！」

コナンが固まった。

「マスタードガス、なんやそれ？」

どうやら平次にはわからなかったらしい。それを快斗が注釈する。

「マスタードガスって言うのは、強力な毒ガスだ。皮膚から体内に侵入するから、ガスマスクも効かない恐ろしいやつだ。・・・・・・え！？」

快斗も凍りつく。つまり、この部屋にあるのは毒ガス砲弾らしい。そして。

「何でこんな物があるんだ！！」

この日二回目の台詞を吐く。

「ちょいここははよ出た方がええんやないか？」

という平次の提案を受けて、３人はその部屋を出た。

３人は異様に疲れた感じがした。しかし、結局この部屋に出口はなかった。残る扉も調べねばならない。結局コナン達は全ての部屋を調べる事になった。しかし、結果は散々だった。

二番目の部屋には潜水服がぎっしりと詰まっていたし、次の部屋には殺人光線の研究と考察という何やら物騒なテーマのレポートが

残されていたし、次の部屋は空っぽだったし、その次の部屋にはいくつか服が掛かったクローゼットのような物しか残されていなかった。

最終的に、これらの部屋からは出口らしき物は見つからなかった。

「後一つか。」

快斗がそうつぶやいたように、残った部屋は一つだった。

「ここにないんと、うちら完全にアウトやな。」

平次もこの部屋に最後の望みを託していた。

「よし、新一やってくれ。」

「おう。」

そしてコナンはキック力増強シューズでボールをける。

「イッケー!!」

サッカーボールは見事に命中し、扉は開いた。しかし、開いた途端3人はあることに気づいた。

「何や機械の音がしいへんか?」

最初に指摘したのは平次であった。

「「ああ」」

二人もうなずく。

今までになかった事だ。早速３人は中に入ってみる。

その部屋にあったのは、銀色の異様な機械であった。どちらかというと、映画かアニメに出てくるようなタイムマシンを連想させるような物であった。

その機械に附属するように、カプセルのような物がついていた。そして、３人の目はそのカプセルの中身に釘付けになった。

「「「女の子だ！！！」」」

遭遇（後書き）

冒頭に載っているのは有名な玉音放送の内容です。
さて、次回はコナン達が見つけた少女の謎が明らかになります。
乞うご期待。

御意見御感想お待ちしています。

救助

２００７年

３人

「「「女の子だ！！！」」」

想定外の事態に困惑する３人。

快斗

「どうする？」

コナン

「どうするって言われてもな。」

平次

「取り敢えず助けた方がええんとちゃう？」

２人

「「そうだな。」」

３人は機械に取り付き、なんとか少女を助けようと試みる。しかし。

平次

「だめや、開かへん。」

機械はびくともしない。

快斗
「なんとかならないのか？」

コナン
「うーん・・・・お！」

コナンが何かに気づいた。

2人（快斗と平次）
「どうした？」

コナンは答えず、それに近づいた。彼はまるで隠されている様におかれていた封筒を拾い上げた。

コナン
「何だこれ？」

コナンは手紙を広げる。

2人
「何が書いてあるんだ（や）？」

コナン
「私は、海軍技術大佐、上社圭介（かみやしろけいすけ）。この人体保存装置の開発責任者です。中に入っているのは私の娘の香代子です。この装置は元々、戦場で経験を積んだ優秀な兵士を次の戦争まで無傷で体を老化させることなく保存させるために開発されました。しかし、動力に始動させるのに大電力を必要とする重力炉を用いたため、結局量産不可能とされて作られたのはこの1台のみです。この戦争は恐らく日本

の負けで終わるでしょう。アメリカでは仁科博士が研究していた核分裂兵器が実戦配備間近と聞きます。今後の戦争を決めるようになるのは恐らく科学兵器でしょう。この装置も、そうした物の一つになるやもしれません。実はこの装置の動力炉である重力炉は生産こそ難しいですが、一度動けば半永久的に動き続けれます。さらに、爆弾に転用すれば、それこそ核分裂兵器とは比較にならぬ破壊力を生み出す可能性があります。娘は、この装置と帝国特殊兵器研究所について知りすぎました。だから、娘とともに、この装置を隠す事にしました。この手紙を読む人が良識の持ち合わせた方ならば、どうか娘を助けてください。そして、この装置を・・・・」

そこで、コナンの読む声が止まった。

平次
「どうしたん工藤？」

快斗
「早く続き読めよ。」

二人がせかす。しかし、コナンは首を振った。

コナン
「読みたくてもよめねえんだよ。続きがないんだから。」

2人（平次・快斗）
「「え！！」」

二人がコナンの読んでいた手紙を見る。確かに、そこからは文章の続きはなかった。と、そこで平次があることに気づいた。

平次
「けどこの手紙、2枚見たいやけど。」
確かに、手紙は2枚であった。しかし。
コナン
「2枚目の内容は全く違うぜ。」
2枚目の冒頭には、『人体保存装置の開閉時の操作について』と書かれていた。
快斗
「そうか。けどこれでこの中の子は一応助けれるわけだな。」
コナン
「そうみたいだな。よし、とにかくこの子を外に出そう。」
こういうわけで、3人は取り敢えず装置の中の女の子を助ける事にした。
コナン
「まず、容器(カプセル)の左側の小型扉をあける。」
残った二人が、容器に取り付き探す。
平次
「あったで。」
そして平次はそれを開けた。

コナン
「次に、右側の青いレバーを下げる。」
平次
「下げた。」
コナン
「最後に、ボタンで８４９６と入力する。」
その青いレバーの隣には、電卓のボタンのように、１から９までの数字を書いたボタンがあった。平次は言われた数字を入力する。
すると、機械がものすごい音を立てた。
３人
「「「うわ！！！」」」
３人が驚く。その間に、扉が開いた。
快斗
「やった！！」
平次
「外に出すで。」
２人は少女を外に出す。そのとき、２人はあることに気づいた。
平次
「何やこの子？」

快斗
「冷たい。」
2人の言葉に、コナンはもう一度説明をよく読む。そしてわかった。
コナン
「あ、しまった。この装置から出した後は素早く体を毛布などで温めること！」
2人（快斗・平次）
「「え！！」」
さすがに3人とも毛布は持っていない。一応、マッチは持っているが燃やす物がない。おまけに、もし燃やせても、酸欠の危険がある洞窟内では危険だ。
平次
「ど、どうするんや？」
コナン
「とにかく上着を。」
3人とも着ていた上着を少女にかぶせるが、いくらなんでも力不足だ。
コナン
「まずいな。」
説明には、体の温度が下がっているため、温めるのに失敗すると、

脳に障害、場合によっては死に至ると書かれていた。

快斗

「こうなったら。誰かが抱いてあたためるしかないだろ。」

2人（コナン・平次）

「「な、何いいい！！！！」」

救助（後書き）

さあ一体誰が少女を助けるのか？乞うご期待

会話

2人（コナン・平次）
「「何！！」」

快斗のとんでもない提案に、2人は驚かずにはいられない。

快斗
「仕方ないだろ。毛布のような物ないし、まさか火をつけるわけにもいかないし。他にどうしろっていうんだよ。」

快斗の言う事は正論である。ちなみに、火をつけれないのは、酸素を急激に消費し、酸欠の恐れがあるからだ。何年か前にも、防空壕内で遊んでいた小学生が酸欠により亡くなるという前例もある。だから、不用意に火をつけるなど自殺行為に等しいのだ。

コナン
「わかったよ。けど俺は抱くの嫌だぜ。」

平次
「俺もや。」

快斗
「俺だって。」

やはり恋人のいる手前、3人は嫌がる。けど、少女の命が危ないのも重々承知している。そこで。

コナン
「ようし、こうなったら世界一公平な、じゃんけんで決めようぜ。
」

コナンが気を利かせて提案する。

2人（快斗・平次）
「わかった。」

2人にも良い考えはないため、承諾した。

3人
「せーの、最初はグウ、ジャンケンポイ。」

結果は・・・・・
快斗・・・チョキ
平次・・・チョキ
コナン・・・パア

コナン
「げっ！！！」

自分で提案しておいて、負けてしまった。

快斗
「よし、新一だな。」

平次
「頼むで工藤。」

もう観念するしかなかった。

コナン
「わかったよ。けど蘭には言うなよ。」

2人に念を押すコナン。

快斗
「わかってるって。」

平次
「俺と快斗を信じろや。」

と言うが、その顔は言う気満々だ。

コナン
（覚えてろ。）

と内心で思いながら、少女に上着を着せ、抱きかかえる。ちなみに、少女の格好は頭に防空頭巾をかぶり、もんぺを履いた当時の標準服だ。

（早く起きてくれよ。）

とにかく、早くこの状況から脱出したかった。

しかし、少女は中々起きない。さすがに、3人とも心配になってきた。

平次

「起きんな。」

快斗

「おい新一、大丈夫か？」

コナンも心配になってきた。ただ、脈はあるし息もしているから、命に別状はないようである。

コナン

「大丈夫だとは思うけど。」

コナンもお茶を濁すように、そうとしか言いようがなかった。

しかし、さらに１０分たっても起きない。

３人の間を重い空気が支配し始めた。このままこの少女は目を覚まさないのではないか？そんな不安が３人を取り巻いていた。

そしてしばらくして、ようやく少女に動きが見られた。

少女

「うーん。」

コナン

「おい、おい。」

そう言って、彼女を揺さぶってみる。

そうして、少女はようやく目を開けた。

快斗
「やった！！」

平次
「よかったわ。」

３人に安堵の息がもれる。

しかし、問題はここからだ。あの手紙の内容が事実なら、彼女は６０年前の人間なのだ。

少女
「あ、あなた達は？」

彼女が最初に言った言葉だった。

コナン
「おれは・・・・江戸川コナン。」

本名を言うか迷ったが、取り敢えず今とうしている名を名乗る。

快斗
「俺は黒羽快斗。よろしく。」

平次
「おれは服部平次や。よろしゅう。」

少女
「私は、上社香代子（かみやしろかよこ）。」

手紙に書かれていたとうりだ。そして、コナンは念のための質問をしている。

コナン
「で、香代子ちゃん。今年が何年だかわかる？」

香代子
「え！何言ってるの、今年は昭和２０年でしょ。」

これは決定的な言葉である。もう間違いなかった。

コナンたちはどう言おうか迷う。いきなり今年は、平成１９年だ。戦争は負けたんだと言って良い物だろうか。そう思ったのだ。

しかし、言わなければ先には進めない。意を決して言う事にした。

コナン
「香代子ちゃん。ショックかもしれないけど。今年は平成１９年。昭和に直すと、８２年なんだ。」

彼女はその言葉に、混乱した。

香代子
「え？え！？」

快斗
「つまり、君がこの機械に入ってから６２年たっているんだ。」

平次
「信じられへんかもしれんけど。」

香代子
「そ、そんな。じゃあお父さんは、それにみんなは。そんな・・・・」

彼女が取り乱し、最後には泣き出してしまった。

3人にはただそれを見ている事しか出来なかった。とにかく、彼女が泣き止むのを待って、説明していくしかなかった。

会話（後書き）

というわけで、オリキャラの登場です。彼女が今後大きな存在になっていきます。乞うご期待。

感想・意見お待ちしています。

脱出

コナンたちは香代子に一つ一つ分かりやすく話した。今は平成１９年であること。戦争は昭和２０年８月１５日に終わり、日本の負けで終わった事。その後日本は復興した事。

最初こそ取り乱したが、彼女はその一つ一つを冷静に聞き、そして受け入れた。

香代子

「そう。・・・・６０年か。私はつまり浦島太郎ってことね。」

その話し方は新一達の予想していた物より大人びた話し方だった。

彼女の背格好はコナンたちより一回り大きいぐらいだから、彼女は小学校２，３年生と考えていた。

快斗

「ところで、君いくつ？小学校２年、３年？」

疑問を快斗がぶつける。その返答は予想外の物だった。

香代子

「小学校？・・・・・・ああ、国民学校のことね。え！何言ってるの、私は女学校の１年生よ。」

平次

「女学校？」

コナン

「戦前の、中学校のことだ。・・・え！？」

そんな馬鹿な。現代の中学生の体格からしたら余りにも彼女は小さい。もっとも、これも仕方がないこと。

コナンも後に知ることになるが、実は昭和２０年というのは戦争

中でも極端な食糧不足になった年で、その影響は子供達に大きく及んでいた。ただでさえ、この昭和前期の子供の平均身長は現代と１５ｃｍ近くも違う。なのに昭和２０年の平均身長はさらに１０ｃｍ近く低いのだ。実際、当時の教師が、あまりに小さい子供達の背に、身体測定を恐れたという話もある。

とにかく、コナンたちは身長の話をするのをやめて、話題を変えた。

コナン

「え、じゃあ君は今１２歳なんだ。」

それにも、また佳代子は意外そうな顔をする。

香代子

「え、私は１４歳だけど。」

３人（コナン・平次・快斗）

「え！！」

これも時代のギャップによる物。実は当時は歳を数え年で数えていたからこうなるのだ。

とにかく、コナンはまた話題を変えることにした。このままではいつまでたっても話が前に進まない。

コナン

「もういいや。ところで、俺たちが聞きたいのはもっと重要なことなんだ。実は俺たち・・・・」

コナンはどうしてここに紛れ込み、そして彼女を見つけるところまでの経緯を話した。

香代子

「つまり、出口がわからなくて迷ってると。」

短絡的に言えばそうなる。

香代子

「けどおかしいわね。部屋を出て右に行けば出口に通じる道に行くはずなのに。」

平次

「そんなあほな。だって行き止まりだったで。」
そのとき、快斗が何かに気づいた。
快斗
「わかった。あの壁、誰かが後で作ったんだ。」
3人（コナン・平次・香代子）
「「「え！！！」」」
快斗
「確かあそこの壁だけ色が少し違っていた。」
快斗の意見に、コナンも平次もそういえばそうだと納得する。しかし、謎は解けても重大な問題がある。
平次
「けど、じゃあ出口はどこにあるんや？」
そう、出口はわからない。
コナン
「香代子ちゃん。他に心当たりはない？」
頼れるのはもはや彼女だけだ。
香代子
「そうね。・・・・・あ、そういえば。お父さんがいざとなったらこの部屋の壁を叩けって言ってた。」
3人とも直ぐに顔を見合わせ、行動に出た。
コナン
「壁を叩けっていうのは恐らく。」
快斗
「反響でどこかに違うところがあるはず。」
平次
「だな。」
3人とも注意深く壁を叩く。すると、快斗がついに見つけた。
快斗
「あった！」
他の2人がよる、たしかに、音が違う。しかし、ただ叩くだけで

は何も起きない。
快斗
「新一、平次。スクラムだ。」
快斗に言われるまま、２人が並ぶ。
３人（コナン・平次・快斗）
「せーの！！」
そして３人で体当たりすると、そこの壁が崩れ、新たな洞窟が現れた。
２人（快斗・平次）
「やった。」
コナン
「よし、香代子ちゃん、行こう。」
香代子
「ええ。あ！」
彼女がふらついた。
コナン
「大丈夫？」
香代子
「ええ。ごめん。お腹が空いて。」
よーく考えれば彼女は６０年も食事をとっていない。それにコナンたちも持ってきたおにぎりをまだ一口も食べてない。
コナン
「よし、じゃあ行く前に腹ごしらえするか。」
というわけで小休止。香代子の分は３人からわけたが、ただ梅を入れただけのおにぎりを「わ！白いご飯だ！」と喜んで食べる彼女の姿を見て３人の心境は複雑だった。
その後、食べ終えると４人は出発した。
洞窟はひたすら登り勾配で、苦しかったが、なんとか２０分かけて登りきった。終点は大きな岩に塞がれていたが、それをなんとか取り払い、４人は外に出た。

そこで、コナンたちのライトの電池が切れた。実に危うい脱出であった。

出た場所は雑木林の中で、４人はそのあと１５分ほどその中をさまよったが、最終的にコナンたちを探していた蘭たち御一行と合流した。

時計の針は、既に５時半を指していた。

脱出（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

追憶　上

蘭
「新一。ついに見つけたわよ・・・・。」
これが、蘭が地下から出てきた新一に放った最初の言葉である。
コナンはその後ろの異様なオーラに一歩引く。
コナン
「ど、どうしたんだよ蘭。」
蘭
「どうしたですって。そっちこそ、自分の胸に手を当ててよーく考えて見なさい・・」
と、言い終わらぬ内にコナンに襲い掛かる蘭。
コナン
「うわあああ!!!!!」
逃げるコナン。
蘭
「待ちなさい!!」
追う蘭。
快斗
「もしかして、原因あれかな?」
平次
「多分な。」
自分のしたことを棚にあげ、安堵の息を漏らす快斗。そして悪魔で他人事の平次。もっとも、後でこの2人も恋人達から制裁を受けることとなるが、それは別の話。

２時間後工藤邸
ゴタゴタが終わり、取り敢えず一行はここに戻ってきた。
まずコナン達が行ったのは、今回の経緯を佐藤警部と高木刑事に説明する事であった。その間に、蘭たちに頼んで、香代子を着替えさせる。防空頭巾にモンペ姿では目立つからだ。
佐藤
「つまり、工藤君たちはあの神社の地下で謎の日本軍の基地を見つけたということ。」
コナン
「簡単に言えばそうなります。」
高木
「で、その時この手紙とあの少女を見つけたと。」
高木刑事がコナンから渡された手紙を見せる。ただ、２人ともまだ半信半疑という感じだ。そりゃまあ映画か小説のような話には間違いあるまい。
快斗
「やっぱ簡単に信じてもらえそうにはないようだな。」
コナン
「まあ現場をみてもらえば嫌でも信じてもらえるよ。」
平次
「そや。」
と、そこへ着替えを終えた香代子と蘭たちが降りてきた。香代子

はサッパリとしたワンピースに着替えていた。中々似合っている。そして、その顔はとびっきりの笑顔であった。

蘭

「香代子ちゃんたらすごいはしゃぐんだもん、ビックリしちゃった。」

香代子

「だって、スカートを履くなんて1年ぶりだもん。」

全員

「1年！！」

現代だったら有り得ない事だ。もちろん今ならズボンばかりを好む女子も多いが、全く履かないなんて子は稀であろう。

香代子

「だってスカートの配給なんて受けてないし。履けば非国民って言われるし。それに今年から制服のセーラー服もヘチマ襟の服になっちゃったから、こんなおしゃれするのも久しぶりよ。」

全員

「・・・・」

全員言葉が出ない。彼女の格好は現代の基準でいえば、とてもおしゃれの部類には入らない。普段着だ。それを嬉しそうにおしゃれというのだから、時代のギャップを感じずにはいられない。コナンたちから彼女が６０年前の中学生だと言われても半信半疑だった佐藤警部や蘭たちも彼女の姿を見ると、納得してしまう。

ちなみに、太平洋戦争中女性がまったくスカートを履かなかったというわけでない。余裕があった最初の頃は、まだ普通に女学生達は履いていた。もっとも、そのスカートも布不足で襞なしだったが。

コナン

「ま、とにかく座ってよ。」

呆然としていた彼女らに座るようすすめるコナン。

そして全員が座った。

コナン

「じゃあ香代子ちゃん。君の自己紹介をしてくれないかな。」
香代子
「ええ。名前は上社佳代子。歳は１４。帝丹女学校の１年生。」
と、彼女の言葉に蘭が反応した。
蘭
「え！帝丹女学校って、私たちの学校の前身の学校よ。確か、戦後に帝丹学園って言う学校と合併したはずよ。」
香代子
「帝丹学園は私の学校の近くよ。」
コナン
「それで？」
コナンが話を進めるよう言う。
香代子
「家族は、お母さんが5年前に死んで、６つ歳上のお兄ちゃんは海軍の看護兵よ。」
ここで彼女の自己紹介は終わった。
コナン
「じゃあ香代子ちゃん。君があの機械に入った経緯を言ってくれない。」
香代子
「・・・・いいわ。」
ちょっと、ためらったが彼女は話し始めた。こうして、彼女の想いは１９４５年7月に飛ぶ。

看護兵＝軍隊で看護師の役割をする兵隊
服の配給＝昭和１７年に開始された。家族の人数によって点数がふられ、その点数分の服だけ買えた。点数自体が少なく、また配給される服の質も悪かったため、国民は苦しい生活を強いられた。

追憶　上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

追憶　中

香代子
「あの日は朝、友達の圭子、それに美佐代と一緒に学校に登校するところだったわ。」

１９４５年７月

圭子
「今日は久しぶりに裁縫の授業があるわね。」
お下げがよく似合っている少女が言う。
美佐代
「本当に授業なんて久しぶりね。ここの所工場に行くか、警報で授業が潰れるかだったもんね。」
こちらはその隣を歩いているおかっぱ頭の娘の言葉。
香代子
「今日は敵がこないといいわね。」

３人の少女は、その日久しぶりに行われる授業に胸膨らませながら歩いていた。
しかし、しばらくして、小さいが空からエンジン音がしてきた。
３人ともそれに気づいた。
美千代
「何かしら？友軍機？」
圭子
「海軍さんの白菊じゃないかしら？」
徐々にその音が近づいてくる。
美千代
「違うわ！敵機よ。」
香代子
「ムスタングよ。２人とも近くの防空壕まで走るわよ！！」
３人は走り始めた。

２００７年

和葉
「ちょい待ち、なんで音だけで敵の飛行機ってわかったん？」

和葉が質問する。確かに、現代人からすれば音だけでどうして敵味方が識別できるかわからない。

香代子

「私たちは音楽の授業で何度も敵の飛行機の音が入ったレコードを聴いたから、だいたいわかるわよ。」

その場にいた全員言葉がでない。今とは余りにも違いすぎる。

もうひとり、質問をした人物がいた。青子である。

青子

「白菊とマスタングって何？」

香代子

「白菊っていうのは海軍の練習機のことよ。米花町にあった海軍の飛行場にいたから、私たちには馴染の機体だったわ。マスタングっていうのは、硫黄島から飛んでくるアメリカの戦闘機よ。」

青子

「へええ。」

青子は少し驚いた表情をする。目の前にいる少女が、現代ならミリタリーオタクしか言わないような軍事知識を披露したのであるから最もとも言える。

コナン

「話を続けて。」

香代子

「うん。私たちはとにかく防空壕がないか探したわ。」

１９４５年7月
美佐代
「だめよ、このあたりにはないわ。」
その付近は畑ばかりで、不幸にも防空壕がなかった。
香代子
「仕方ないわ。とにかく走るのよ！！」
そういった時、圭子が悲鳴に近い声を上げた。
圭子
「来た！！」
２人が顔を上げると、雲の間から、２０、いや３０機近い飛行機が飛んでくるのが見えた。そしてあろうことか、彼女らの方に数機が急降下してきた。
香代子
「まずい！」
３人は死に物狂いで走る。
その横を、自転車に乗り、片手にメガホンを持った防空団のおじさんが走りぬける。
防空団員
「空襲警報発令！！空襲警報発令！！」
美佐代
「いまさら遅いわよ。」
彼女が悪態をつくが、どうとなるわけでもない。
敵のエンジンがどんどん大きくなる。そして
ドドドド・・・・
ついに撃ってきた。３人は慌てて伏せる。

ピュンピュンという音とともに、地面に銃弾が突き刺さり、あたり一面を土埃のカーテンが覆う。
発砲したのはその一機だけではなかった。後続する数機も連続して発砲する。時間にして1分程の出来事が、彼女らには永遠に感じられた。
敵機は一連射すると、それで満足したのか飛んでいってしまった。
香代子は恐る恐る顔を上げた。
香代子
「2人とも大丈夫？」
美佐代
「ええ、なんとか。」
圭子
「死ぬかと思った。」
立ち上がった圭子を見て、2人はあることに気づいた。
香代子
「圭子・・・・」
美佐代
「あなた、髪が。」
圭子のお下げの髪は、銃弾が掠ったのか、吹き飛んでなくなっていた。
圭子
「あ・・・・・・」
彼女自身も気づいたらしい。しきりに手を頭の方にやる。そして、俯いてしまった。
しかし、すぐに顔をあげて笑顔を作った。
圭子
「大丈夫よ。髪ならまた直ぐ生えるわ。」
彼女は目をそらし、表情を暗くした。
圭子
「それに、あの人に比べればましよ。」

２人（香代子・美佐代）
「え！？」
２人が圭子が言った方を向いた。
そこにあったのは、ばらばらになった自転車と、血まみれの男性の死体であった。それはさっき彼女らを追い抜いた防空団員の成れの果てであった。

裁縫・・・・現代で言う家庭科のこと。

追憶　中（後書き）

彼女が装置に入るまでの追憶編に入りましたが、予想より長引いています。もうしばらく続きそうです。早く読みたいと思う方もいるでしょうが、今しばらくご辛抱を。

評価お待ちしています。

追憶　下

２００７年

香代子

「思い出すだけでも、あのマスタングが憎たらしくてしょうがない。あいつら圭子の大事な髪を奪っただけじゃなくて、私たちの学校にも襲い掛かったのよ。」

快斗

「え？つまり学校が攻撃を受けたってことか？」

香代子

「そう、あいつらったら校舎にロケット弾を打ち込んだのよ。おかげで校舎が半壊して、もう授業どころじゃなくなっちゃったわよ。」

まさに当時の時代を象徴する事態と言えよう。

香代子

「結局、家に帰るよう指示が出て、私は家に帰ったの。そしたら、珍しくお父さんがいたの。」

佐藤

「そのお父さんがこの手紙を書いた、上社啓介さんね。」

香代子

「そう。で・・・・・」

１９４５年7月上社家

香代子

「ただいま。」

大佐

「おう、お帰り。」

香代子

「あれ、お父さん帰ってたの。」

普段昼はいない父親の姿に、香代子は驚いた。

大佐

「ああ、さっき空襲があったろ、それで家とお前が無事か気になってな。よかった無事で。」

香代子

「うん。けど、学校が・・・・・」

香代子は父親に朝のことを話した。

大佐

「そうか・・・・・学校がやられたか。しかし、お前が無事で何よりだ。だが怖いのは夜だ。大概マスタングが来るのは夜の爆撃の露払いだ。」

そして、事態は父親の言ったとおりに進むことになる。

夜１０時を過ぎた頃だった。突然、玄関の電話が鳴った。

大佐

「上社だ。・・・・・そうか・・・・・・・わかった。」

受話器を置くと、彼は急いで娘を起こす。

大佐

「起きろ香代子！！避難するぞ！！」

上社大佐は香代子を叩き起こすと、直ぐに家から外に出た。
香代子
「お父さんどこ行くの？」
大佐
「研究所だ！！」
上社大佐がそう言った時、電源が点けっ放しのラジオから、臨時ニュースが流れた。
ラジオの声
「東部軍管区情報、敵重爆多数、帝都に侵入しつつあり、空襲警報発令！！」

２００７年
コナン
「研究所って軍の施設だよね、なんで君のような娘が入れるの？」
確かに、普通なら軍の施設に民間人が入るのはおかしい。
香代子
「私はお父さんに何度か研究所にお弁当を持っていったことがあるの。最初は入り口の兵隊さんに渡してたんだけど、その内中に入れてくれるようになったの。その時あの研究所の兵隊さんや働いていた人と顔なじみになったの。理由はわからないけど。」
声には出さなかったが、コナンは彼女が知りすぎたというのはそ

のことだとわかった。
高木
「多分子供だから大丈夫って思ったんじゃないかな？」
香代子
「そんなところでしょうね。話を続けます。」

１９４５年７月
研究所の入り口に着くと、顔なじみの兵士が立っていた。
大佐
「中田軍曹、平戸上等兵曹、中に入るぞ。」
中田
「あ、大佐殿。どうぞ、お入りください。」
中田軍曹はすぐ通そうとしたが、平戸兵曹が止めようとした。
平戸
「大佐、香代子ちゃんも一緒に入れるのですか？ちょっと今はまずくありませんか？」
さすがに上官といえど、またその娘が顔見知りでも、非常時に子連れで研究所に入らせることに彼は躊躇した。
大佐

「責任は後でいくらでも取ってやる。とにかく、入るぞ。」
そう言って、上社大佐は香代子を連れて強引に研究所内に入った。平戸兵曹はなおも食いさがろうとしたが、それどころでない事態になった。
「入れろ！！」
付近の住民が我も入れろと集まってきたのだ。彼らへの対処で手一杯になってい、とても大佐を止めている余裕はなかった。
一方、中へ入った上社大佐は自分の研究室に入った。そこでは、助手の堀田技術大尉が待っていた。
堀田
「あれ、大佐、なんで香代子ちゃんまで？」
驚く彼を尻目に、彼は装置の起動準備にかかる。
大佐
「詳しい話は後だ。今装置は動くか？」
堀田
「はい、動かすように整備しておくのが自分の仕事ですから。４基中常に１基は動きます。」
大佐
「よし、香代子お前はこれに入りなさい。生命維持装置はこれしか作動しない。」
香代子
「え！お父さん。」
いきなりの事態に、彼女は動揺する。
大佐
「大丈夫、空襲が終わるまでだから。さあ入りなさい。」
結局、香代子は父親の言を信じ、装置の中に入った。そして、扉が閉じられた。

２００７年
香代子
「私が覚えているのはそこまでです。」
彼女のあの日への追憶はこうして終わった。

追憶　下（後書き）

もはやコナンじゃないかも・・・・
ま、とにかく今回もお付き合いいただき感謝します。
御意見・感想お待ちしています。

意外な事実

コナンたちは翌日から早速行動を開始した。まず、取り敢えず基地からあの装置を運び出す事から始まった。

最初、コナン達は直ぐに自衛隊に基地のことを伝えようと考えていたが（不発弾処理は自衛隊の仕事なのです。）、それに対し香代子が異議を唱えた。

彼女にとって、父親が作ったあの装置が唯一の形見である可能性が高いから、あれを没収されたくないというのが理由である。

結局、コナン達はこの意見を受け入れた。コナンとしても、手紙に書かれていたこの装置を・・・・という文面が気になっていたのだ。

もっとも、この提案によって阿笠博士がとばっちりを喰らう事になった。

装置を運ぶには、コナン達脱出に使った狭い一本道しかない。だから、装置をまず分解せねばならなかった。

そのため、阿笠博士が構造を見るため基地の中に入ったのだが、これによって丸一日潰れ、さらにその後装置を分解するのにまた丸一日。さらに運び出すため、人を集めそして運び出すのに2日かかった。ちなみに、集められたのは高木刑事に寺井さん、さらに最近仕事がなくて暇していた毛利小五郎である。

そして、それらが全て終わったところでようやく自衛隊に通報した。もっとも、これが後々問題を引き起こす事になるのだが。

分解された装置は阿笠邸に持ち込まれ、阿笠博士の手によって徹

底的に調べられる事になる。
一方、コナンは佐藤警部に手伝ってもらって、行動を開始した。
それは、香代子の父親や香代子自身の戸籍がどうなっているかを確かめねばならなかった。そのため、この日彼は香代子とともに区役所に足を運んでいた。

米花区役所
担当職員
「戸籍の調査ですか？」
老齢の職員はそう言った。
佐藤
「ええ、上社香代子さんという人について。」
佐藤警部がそう言った時、職員が渋い顔をした。
担当職員
「それは、個人情報保護法に引っかかる可能性が。」
その言葉に、佐藤警部は強権を発動した。まあなんのことはない、警察手帳を見せたのだ。
佐藤
「重要な件なんです。探してください。」
担当職員
「わかりました。」
その職員は直ぐにパソコンで調べ始めた。
そして、数分後、その結果が出た。
担当職員
「この方は、６２年前に行方不明になっています。昭和３０年７月に戸籍抹消になっています。」
これは佐藤警部も予想していた事だった。

佐藤警部
「御家族についてはわかりますか？」
担当職員
「それについては、ちょっとお待ちを。・・・・お父さんもやはり行方不明になっていますね。お兄さんがいたようですが、ちょっとこの方については引っ越したらしく、これ以上は調べれませんね。」
職員もお手上げであった。結局、佐藤警部も今はそれ以上はどうしようもなかった。
彼女は、お兄さんの引越し先を聞くと、いすに座って待っていたコナンたちのもとに行く。
コナン
「どうでした？」
佐藤警部
「やっぱり香代子さんの戸籍は抹消されていたわ。」
コナン
「そうですか。」
コナンが彼女の方を見ると、やはり暗い顔をしていた。戸籍がないことは事実上いない人間ということになるのだからしょうがない。
コナン
「家族については？」
佐藤警部
「お兄さんは生き残ったみたいだけど、ここではわからないわ。一応、引っ越した先は教えてもらったけど。そっちへ行ってみましょうか。」
コナン
「そうしましょう。さ、香代子ちゃん。」
香代子
「・・・・・」
お兄さんが引っ越した先は、都内の別の市であった。

その市役所で、佐藤警部が再び職員に聞く。そこで、意外な事が分かった。

担当職員

「その人は養子になっていますね。苗字が変わっています。ただ、昭和５７年に交通事故で亡くなっていますね。その息子さんも亡くなっています。お孫さんは生きていらっしゃいますが・・・・どうします？」

佐藤警部

「一応教えてください。」

担当職員

「わかりました。」

そして、佐藤警部は名前を手帳にメモした。しかし、その名前に見覚えがあるのに気づいた。

佐藤警部

「この人って・・・」

その人の名前は、・・・・・・・・・・・・本山幸平

意外な事実（後書き）

この話からサブタイトルを2文字から変えました。
さあ最後の人物の名は一体誰でしょうか？ヒントは前シリーズです。
御意見・御感想お待ちしています。

歯車が回る時

本山幸平。かつて黒の組織の薬品開発を行い、その後寝返ったこの作品のオリキャラである科学者。
その彼は黒の組織に入っている間も、特に罪になるようなことには直接関与していなかったことから、直ぐに釈放されていた。その後慰謝料をたんまりと手に入れた彼は、ささやかな薬局を開こうとしていた。
もう組織とは関係なく、得意の分野で平和に商売していこうというのが彼の考えであった。
その彼に、この日小さな客人が訪れた。
？

「こんにちわ。」
本山
「うん！？」
一体誰だろうと彼が表を見ると、２週間前にお世話になった少年と、見知らぬ少女の姿があった。
本山
「工藤君じゃないか。」
そこいたのは、江戸川コナンこと工藤新一と、彼は知らなかったが上社香代子であった。
コナン
「どうも。」
本山
「どうしたんだい？解毒剤の開発に問題・・・・って訳じゃない

な。だったらそんな女の子を連れてくるはずないし。」
本山は少女をまじまじと見つめた。
（なんでだろう。この娘を見ていると他人という感じがしない。）
コナン
「実は、話を聞きたいのはこの娘についてのことなんです。」
本山
「この娘のこと？はて、確かになんとなく親近感を覚えるが、あった覚えはないぞ。」
コナン
「あの本山さん。おじいさんのこと何か分かりますか？」
本山
「俺の爺さんかい？うーん、小さい頃何度か会っているけど、あんまり覚えていないな。あ、ただその爺さんが昔海軍で救護兵やっていたという話は親父から聞いたな。」
コナンはその言葉に注目した。
コナン
「もっと何かわかりませんか？」
本山
「え！？他にか・・・・・・あ、そういえば爺さんが養子だって話は聞いたぞ、確か戦争の時父親と妹さんを失って、親類の家に入ったって・・・・・旧姓は確か上社だ。」
コナンは確信した。
コナン
「あの本山さん。これから大事な話をします。信じられないかもしれないけど。とにかく聞くだけ聞いてください。」
コナンは5日前に起きた事を話した。そして、最後に香代子のことを話した。
本山
「つまり、その娘は６０年前に死んだはずの祖父の妹というのかね？」

コナン
「そういうことです。」
にわかに信じられない話に、本山は顔をしかめる。
と、そこで重大なことに気づいた。
本山
「ちょっと待った。その娘がもし私の祖父の妹とするね。で、君は私に何してほしいと？」
それは話題の確信をついた一言であった。
コナン
「実はそのことなんです。この娘には戸籍がなくて、どうしたらいいか困っているんです。今日は一応この娘の正体が少しでも分かればと思って来たわけです。」
本山
「なるほど。君自身はどうしたいんだい？」
話を香代子にふる。
香代子
「私は・・・・・とにかくこの時代で生きていくしかありません。けど、今の私は幽霊です。」
本山
「そうだろうな。君が役所に言って、６０年前に行方不明になった上社香代子って言っても誰も信じない。仮に信じてもらえても、君がこの時代で生きていこうと思うなら、しかるべき身元引き受け人が必要だ。」
それは致命的な言葉であった。はっきり言えば、身元引き受け人になってくれそうな人はいない。コナンの時みたいに・・・・・とはいかなくなった。黒の組織崩壊の時、阿笠博士のやっていたことがばれ、役所がガードを固くしてしまったからだ。
本山
「そこでだ。俺に提案がある。」
コナン・香代子

「「？？」」

都内某所

？

「例の研究所の跡についてですが、やはり最近になって人が何かを持ち出した形跡が見られました。」

ビルの一室で、２人の男が話し合っていた。

？

「持ち出された物は恐らく、この文章に記されていた、試製人体保存器と思われます。」

男が持ち出したのは、極秘と赤い文字で印刷された古ぼけた冊子であった。

？

「この中身が正しいなら、その動力となっている重力炉は、まさに革命的な発明です。今の日本に、多大な利益をもたらすに違いありません。」

？

「よし、なんとしても差探し出すんだ。我々ＣＩＡの名にかけてな。」

歯車が回る時（後書き）

と言う訳で、ようやっと２０話に到達です。
一体本山はどのような提案をしたのか、またＣＩＡはいかなる組織なのか。乞うご期待。ちなみに、アメリカのあの機関とは全く別物です。

恐怖

都内某所

？

「自衛隊に最初に通報したのは米花警察署の佐藤警部と、高木警部補だそうです。そして、興味深い事に、この二人は3週間前の事件の煽りで、警視庁から左遷された人物です。」

？

「それは確かに興味深いな・・・・・・よし、その人物に接触を図れ。」

？

「わかりました。」

米花警察署

警官

「高木警部補、警察庁の方がお会いしたいそうです。」

若い警官が高木刑事の側にやってくるのなりそう言った。
高木
「警察庁の人が？」
警官
「ええ、佐藤警部にお会いしたかったそうですが、警部は今外出中なので。」
高野
「はじめまして。警察庁の高野です。」
警察庁の制服に身を包んだ男は、敬礼しながらそういった。
高木
「高木です。あれ、特に警察庁の方から何か聞かれる事はないはずですが？」
警察庁の人間が何故自分のもとに来る理由が分からない。３週間前の事件しか心当たりはないあが、あれは片付いたはずだ。何を今さらである。
高野
「あなたに心当たりがなくても、我々には重要なことなので。では単刀直入に聞きましょう。あの旧日本軍の基地跡を見つけた人物についてお教えねがいたい。」
この一言で、高木刑事は目の前の人物に対して警戒し始める。
高木
「何故ですか。教えてください？通報した人物についてはプライバシーの保護が必要であり、例え警察庁の方でも、許可証なしにお教えするわけにはいかないのは、あなたも分かるはず。」
高木刑事としては、これで相手を黙らせれると思った。しかし、高野は薄ら笑いしながら反撃してきた。
高野
「確かに、通常だったらそうでしょう。しかし今回はあまりにも発生した事態が思いのです。実は、ここから先は一部機密事項が関わるのですが、今回発見された基地跡に、最近人が出入りし、何か

を持ち出した形跡がありました。基地内からは毒ガス弾や、特攻隊用の機雷が見つかっています。それらが持ち出され、万が一テロにでも使われたら、それこそただではすみません。もちろん、第一発見者がそうでないとも言い切れない。だから、教えろというのです。これで理由がお分かりかな？」

高野は整然とそう言い切った。だが、高木刑事も下がらない。

高木

「ですが・・・・やはり規則を守らないわけにはいきません。」

高木刑事はとにかく粘った。そして。

高野

「あなたは中々真面目な人のようだ。わかりました。今日は書類の不備という事で、こちらから身を引きましょう。また明日出直しますのでその時こそ、今度は佐藤警部とともに話をお聞きしましょう。」

高野はそう言って出て行った。

だが残された高木刑事のシャツは汗でぐっしょりと濡れていた。

2時間後　工藤邸

高木刑事の姿はここにあった。彼は高野が帰った後直ぐに帰って

きた佐藤警部を引き連れ、ここに来ていた。
今リビングに居るのは、コナン、平次、快斗、高木刑事、そして佐藤警部である。
平次
「つまり、その高野っちゅう警察庁のやつが、あの洞窟について調べていると？」
高木
「そうなんだ。」
快斗
「けど、別に警察庁が事件について首を突っ込む事はないわけじゃないんだろ、気にする必要のあることなのか？」
快斗の意見はまっとうである。一応、警察庁の仕事は警視庁を含む警察機関の統監であるが、決して事件に首を突っ込まない事はない。
しかし、コナンはすぐにこれがおかしい事に気づく。
コナン
「けど快斗。確かにおかしいと言えば、おかしい。あの基地を調べたのは確か自衛隊だぜ。なんで警察が出てくるんだ。」
快斗
「あ！！」
そう、基地の調査は不発弾の存在から主に調査したのは不発弾処理を専門とした自衛隊である。警察は特に事件性のないことから、まだ本格的に調査していない。
コナン
「しかも、その男はあそこから物が持ち出された形跡があるといった。つまり、自衛隊が調査した内容を知っているか、あるいは独自に調査できたってことになる。少なくとも、警察庁の人間である事には疑問符がつくぜ。」
コナンがそう言い切る。
突然現れた謎の男。しかも、その男の背景に何かしらの大きな力

がある。それに気づいた時その場に居た全員に、言いようのない恐怖が襲った。

恐怖（後書き）

というわけで、ＣＩＡが動き出しました。彼らが何者であるが、今後明らかになっていくのですが、皆さんはどうお考えでしょうか？今自分の気になるところはそこにあるのです。

解明

香代子
「それじゃあいってきます。お・・・・・」
本山
「おじさんでいいよ。君はあくまで養子だ。無理に言う必要はない。」
セーラー服に身を包んだ彼女を送り出しながら、彼はそう言った。
香代子
「うん。じゃあおじさん。いってきます。」
本山
「おう、いってらっしゃい。」
そして彼女は行ってしまった。その彼女の姿を見ながら、彼はここ3日間のことを思い出した。
あの日、彼がコナンに提案したのは彼女を養子として引き取る事であった。
彼自身、独身であり子供と暮らした経験はない。しかし、彼女を目の前にしてそう言わずにはいられなかったのだ。
それからは大変だった。彼女のために戸籍を用意したり、学校に編入させる手続きを取ったり、めまぐるしかった。
本山
「あとは、あの子次第だな。」
本山が見る限り、彼女は順応性に優れているように見えた。わずか3日間のうちにあらかたの電子機器の操作方法を覚えたし、カタ

カナの言葉も早いうちに覚えていた。
編入する学校は中学校である。背の問題があったが、これは体質という事で押しとおした。
後は、時代のギャップによる問題が気になるが、それについてはどうしようもない。彼に出来るのは見守るだけだ。
本山
「ま、なんとか切り抜けてくれるだろう。」
今はそう願うのみであった。
本山
「さーて、俺も仕事と。」
薬局の開店は４日後である。早く準備せねばならなかった。
そう思って家の中へ入ったとき、電話が鳴った。
本山
「誰だ？」
自分に電話する者なんていたか？という疑問を持ちながら、とりあえず受話器を取る。
本山
「もしもし？」
佐藤
「あ、もしもし。米花警察署の佐藤です。」
電話の相手は佐藤警部であった。
本山
「ああ、佐藤警部。先日はどうも。どうしたんです？香代子の事は一応片付いた筈では。」
佐藤
「え。彼女については。ただですね、実は・・・・・」
彼女は前日の警察庁の人物について話した。（詳しくは前話参照）
本山
「なるほど。確かに妙ですな。わかりました、注意します。」
そして、彼は電話を切った。

その後、しばらく考え込んでいたが。直ぐに立ち上がると家を出て、自分の車に乗り込んだ。

２０分後　米花町　阿笠邸

本山はチャイムを押した。すると、すぐにその家の主、阿笠博士がでてきた。

阿笠

「おや、本山さんじゃないですか。どうしました？」

本山

「はい、ちょっと気になることがありまして。」

阿笠

「気になること？とにかく中へお入りください。」

博士は本山をソファーに案内した。

阿笠

「で、なんでしょうか、気になることとは？」

本山

「実は、先日工藤君たちが見つけた、香代子の入っていた機械についてお伺いしたいのです。」

そう言うなり、博士の目の色が変わった。

阿笠

「おお。あの装置はすばらしい物ですぞ！！」

博士が歓喜しながら言った。

本山

「具体的には？」
阿笠
「はい。あの装置に使われている動力源は、作った上社博士いわく重力炉と書き残しました。その構造を調べたところ、中枢に特殊な金属を使い、始動時に大電力を使いますが、一度動けばほぼ永久的に動きます。しかも軽量です。現在ある原子力や火力とは比較にならないエネルギーを生み出しますぞ！」
本山は最後の部分に注目した。
本山
「阿笠さん。ではもし軍事転用し、例えば原爆のような用途に使った場合、どうなりますか？」
その言葉に、阿笠博士ははっとした。
阿笠
「え！！そのようなことは考えていなかったが・・・・・そうですね、計算上から言えば。恐らく、広島型原爆の数万倍になります。かつてどこかのアニメにあった。超磁力兵器のごとく、５つの大陸をことごとく海に沈めれるかも・・・・・」
そこまで言って、博士自身恐ろしくなってきた。
本山
「上社博士の危惧したのは恐らくそこでしょうね。だから彼は封印したんでしょう。しかし、それだけのものなら、現在でも充分価値はあります。もしかしたら・・・・・」
本山はそこで１つの仮説にたどり着いた。
本山
「国なら海軍の資料を保管しているはず。まさか、高木刑事に接触したのは・・・・・・ＣＩＡか？」

解明（後書き）

いよいよ次話でＣＩＡの正体がわかります。

近づく脅威

平次
「ＣＩＡ？あのアメリカの？」
本山
「違う！！そうじゃないよ服部君。」
ここは工藤邸のリビング。今ここには、本山にちょうど学校帰りのコナン・快斗・平次、そして阿笠博士がいた。ちなみに、蘭たちは用があっていない。
本山
「私がいっているのはそっちのＣＩＡではなくて、日本のＣＩＡのことだ。」
３人（コナン・快斗・平次）
「日本のＣＩＡ！？」
そんな物聞いた事がない。３人の驚きは当然である。
コナン
「一体それはなんなんですか？」
本山
「私も組織に居た時聞きかじりで聞いただけだから・・・・・。まあ簡単に言えば諜報機関だな。」
平次
「諜報？」
快斗
「ようするにスパイ活動のことだ。」
平次の疑問に快斗が答える。もっとも、平次本人は説明せずとも

わかっていて欲しい物ではあるが・・・

本山

「話はもどるけど、まあ日本のＣＩＡは元の名前からして違う。正式名称はＣｅｎｔｒａｌ　Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ　Ａｇｅｎｃｙだ。綴りは同じだが、訳が全く違う。」

コナン

「訳が違う？」

本山

「アメリカのは中央情報局。日本のは中央知的情報機関って言うんだ。もっとも、アメリカのは最初はＯＳＳっていう名前だったがね。」

平次

「けど、なんでそんな連中が出てくるんや？」

本山

「それについては、阿笠さん、説明よろしくお願いします。」

博士

「はい。」

本山は阿笠博士と話し合った内容（詳しくは前話参照。）を3人にも話してもらう。

快斗

「じゃあそのＣＩＡの目的は、あの娘が入っていた装置ってことか。」

本山

「ＣＩＡは元々太平洋戦争中に当時の連合艦隊司令長官の肝煎りで作った機関らしい。当時の仕事は敵である連合国についての諜報戦が主だったらしいが。現代は内閣直属で、主に外交上有利な情報を集めたり、自国に不利な情報を守るために動いているらしい。黒の組織も彼らには注意していたらしいからね。その能力は組織に勝るとも劣らないと言われていたからな。」

博士

「けど、なんでそんな機関があの装置を追っているんじゃ？」
コナン
「あのさ博士、もっと頭使えよ。いい、あの装置の動力炉が原爆以上の武器になるんだろ。そんな物を日本がもったらどうなる？北朝鮮が核を持った以上のインパクトを持つぜ！！さらにそれを使って色々な交渉が有利になるかもしれねえしな。」
コナンが説明する。それでようやく博士も事情を飲みこむ。
本山
「工藤君の言った事は十中八九合っているでしょうな。それに連中なら警察庁の職員に化けた事もうなずけます。なにせ、国営の機関なんですから。・・・・しかし、こいつは黒の組織よりも厄介な敵かもしれません。」
その言葉に、一同の表情が厳しい物となる。
黒の組織さえ、巨大で手強い相手であった。その組織とほぼ同等の力を持つことさえ脅威なのに、さらに国が敵とは。
本山
「まあ、まだ完全に連中が関わっていると決まったわけではありません。物的証拠は何もないからね。」
本山が落ち着かせるつもりか、そう言った。しかし、そんな物気休めでしかない。仮に、相手がそのＣＩＡでなくても、なんらかの強大な力が関っている可能性が大きいのだ。
コナン
「とにかく、注意しなきゃいけないな。特に、装置を運び込んである博士と、その中に入っていた香代子ちゃんはな。」
快斗
「けど、それは見つけた俺たちも一緒だぜ。・・・・けど、青子達にはどうする？」
それはコナンや平次にとっても同じである。全員彼女らに対して秘密を持つことはいささか心苦しい。しかし、彼女らに余計な心配や危険をかけるのはもっと嫌である。結局・・・

コナン
「蘭たちにはだまっていようぜ。」
3人ともこの意見で一致した。
だが、事態はもう切迫した所まで来ていた。

前日都内某所
？
「あの後、高木刑事と佐藤警部は工藤邸を訪れています。やはり、彼らと今回の件がなんらかの関係があるのは確かなようです。」
？
「そうか・・・・・こいつはおもしろいことになってきたな、フフフ・・・・よし、彼らを見張れ、なんとしても尻尾を掴むんだ。」
？
「わかっております。必ずや2日もあれば成果を上げてご覧にいれましょう。」

連合艦隊司令長官・・・・・真珠湾作戦を成功させ、昭和１８年４月１８日に戦死した、山本五十六大将（死後元帥）のことです。

駆け引き（前書き）

前話において、英語のスペルミスがあったことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

駆け引き

都内某所　ＣＩＡ本部

？

「盗聴の結果、確実にあそこを見つけたのは江戸川コナン、いや工藤新一ですな。」

男はそう言って、報告をまとめた書類を上司に提出した。

？

「そうか。君を米花警察署、いや米花町に潜入させたのは正解だったわけだな。」

報告を受けた男は、報告した相手、２日前高木刑事の前に、警察庁の高野という名で現れた男を見た。

高野

「現在、他の工作員が工藤新一の周辺を洗っています。間もなくその情報が入ってくるものと思われます。」

？

「それは結構な事だ。しかし、向こうもあの黒の組織と戦った相手だ。あまつさえ壊滅に追い込んでいる。我々としてはあまり敵に回したくない相手だな。」

その言葉は、どこか寂しさが感じられる物であった。

高野

「今まで数々の対外工作を成功させた南雲部長にしては気の弱いお言葉かと。」

南雲と呼ばれたその男は、高野の言葉に苦笑する。

南雲

「確かにそうかもな。しかし、相手は民間人だ。外国の工作員の

ように始末できる相手ではない。行動には慎重さが要求される。その事だけはわかっているな。」
高野
「心得ています。」
コナンたちのあずかり知らぬ所で、事態は進んでいた。

一方、その追われているコナンたちはどうしていたか？もちろん、手をこまねいてただ時が過ぎていくのを待っていたわけではない。それなりに対策を講じていた。この日、あの３人は阿笠邸に集まり、ＣＩＡ対策を話し合っていた。ちなみに、工藤邸でしないのは、もちろん蘭たちにばれないようにするためだ。
阿笠邸
コナン
「まず、相手が国の組織ならＮＴＴに干渉して盗聴するのは簡単だろうな。だから電話を使うのは極力止めないと。」
快斗
「それだけじゃ足りねえよ。携帯だってもしかしたらってこともありえるぜ。」
平次

「けど、逆に使わんと怪しまれるで。それにや、もしかしたら郵便も危ないかもしれへんで。」
3人集まれば文殊の知恵。対策を話し合うが次々と意見が出る。
ただ、なんとなくその状況を楽しんでいるようにも見えなくもない。やはり彼らの探偵や怪盗としての血が騒ぐのであろうか。
そんな彼らを、もはや処置無しという表情で見ている人物がいた。阿笠志保である。この前日になって、ようやく彼女の戸籍に関する問題は全て処理され、宮野志保の時の戸籍の改訂と、阿笠博士の養子になる処理が終了された所であった。
志保
「あの人たちは本当に厄介なことを持ち込むのが大好きなようね。」
3人を見ながら、哀、ではなく志保がつぶやいた。
博士
「まあ、哀、いや志保君。そこまで言わんでもいいじゃろ。」
志保
「博士・・・いいえお父さん。彼らにはそれくらい厳しい評価しておいた方がお似合いだわ。なにしろ彼女を眠らせてまで出かける人たちだから。」
なんともひどい言い様だが、じゃあ蘭たちに入れ知恵したあんたはどうなる？
ちなみに、2人ともお互い呼び方を改めている。まあまだ慣れていないが。
博士
「そうかのう？・・・・・あれ、そういえば志保君。珍しいのう。ここの所ずっと研究室に篭っていた君が、こんな時間に出てくるなんて。」
志保
「あ、そうそう。実はそのことで上がってきたんだったわ。危うく忘れるところだったわ。」

志保はここの所解毒剤の開発に没頭していて、小学校から帰ると直ぐに研究室に入り、その後寝るまで出てこないというサイクルの生活を送っていた。

志保

「実は、解毒剤の試作品が完成したのよ。」

博士

「何！マウスでの実験は上手くいったのかね？」

博士はそこに注目した。今までのように、3日限定では意味はない。そこで、マウスによる実験を行っていた。

志保

「5日たっても特に異常はないわ。」

博士の知る限り、5日は今までで最長である。

志保

「10日しても戻らないなら、ほぼ成功よ。後は全員分作るだけね。」

志保の言った言葉が正しいならば、上手くいけば後1週間程度で全員本に戻れることになる。

博士

「そうか、それはめでたいことじゃ。で、新一には言ったのかのう？」

志保

「あの状況じゃ言えないわ。」

志保の指さした方向には、さらに議論を白熱させている3人の姿であった。

打開策

都内某所　ＣＩＡ本部

高野

「工藤新一は、服部平次、そして黒羽快斗とともに、隣の阿笠邸に頻繁に出入りしている姿が目撃されています。」

米花町に派遣した工作員からの最新の情報を、彼は上司である南雲に報告していた。

南雲

「工藤新一以外の人物については調べ終わったのかね？」

高野

「はい。まず、彼が頻繁に会っている阿笠博士は発明家ですね。詳しい履歴は後で書類をみていただければわかります。ただ彼は工学系等の専門家です。もしあの装置を持ち込むとしたら、この人物の家である可能性が高いです。」

そういって、彼は阿笠邸と阿笠博士の写真を渡した。

南雲

「・・・・」

南雲は渡された書類を無言で目を通す。

高野

「あと、服部平次は工藤新一と同じく高校生探偵です。彼も例の組織の薬で現在は幼児化しています。そして、解毒剤の完成まで工藤邸に居候しているようです。気になる点は彼が大阪府警の大物の息子であることでしょうか。」

南雲
「そいつはまた興味深いね。」
高野
「それと、最後の黒羽快斗は怪盗キッドだそうです。もっとも、証拠不十分で警察も逮捕しておりませんが。これについては警視庁の極秘ファイルから入手した情報です。彼も薬で幼児化して、解毒剤の完成まで居候しているようです。」
そう言いながら、彼は別の報告書をだす。
南雲
「まだあるのかね？既に電話帳以上の厚さになっているぞ！？」
彼は机に置かれた工藤新一に関する膨大な資料を指差す。
高野
「連中のことは調べれば調べるほど色々出てきます。」
南雲
「ったく。・・・・・まあいい、その阿笠という発明家をよく見張るよう、草鹿と宇垣に指示してくれ。」
高野
「は！！」

同時刻　米花町　工藤邸

コナン
「やっぱお前も感じたか？」
平次
「当然や。」
快斗
「当たり前だろ。」
ここはコナン（新一）の部屋。そこに、このお馴染の３人組が集まっていた。
平次
「どこの誰かは知らへんけど、誰かがこの辺りを見張っているのは確かやで。」
３人が話し合っている事はそれであった。
探偵の感というかなんと言おうか、なんと３人ともＣＩＡの監視の目があるのに気づいていた。
快斗
「やっぱ本山さんの言ってた、ＣＩＡかな。」
快斗が言った事は的を射ているわけだが、さすがにコナンたちもそこまではわからない。
コナン
「だとすると、まずいな。」
コナンは確証はないとはいえ、その可能性が高いと考えた方がいいと思っていた。
ＣＩＡの実力はわからないあが、本山の言った事を信じるなら、黒の組織と同等もしくは少し高いと考えねばならない。
黒の組織がいかに厄介な組織であったかは、３人ともよーく分かっている。それ以上の組織と戦うとなると、もっと厄介なのは目に見えていた。
平次
「どうするんや？」
快斗

「連中が追っているのがあの装置だから、いっそのこと破壊したらどうだ？」
快斗が冗談めかして言った。なぜそんな言い方するかと言うと、絶対無理だからだ。破壊しようものなら、装置の開発者である上社博士の娘である香代子と、装置を高く評価している阿笠博士の反対にあうのが目に見えているからだ。
そんな意見だから、もちろん2人（コナンと平次）は無視する。
コナン
「どっかに運べないかな？」
平次
「見張られてんのに、どないして運ぶんや？」
もっともだ。
快斗
「なんとかならないかな？」
コナン
「とにかく、今は向こうも強行手段をとりはしねえだろ。なにせ、国の機関だからな。」
そう強気で言ってみるが、不安が払拭されるわけじゃない。
快斗
「ああ、元の体に戻れればもう少しまともに行動できるんだけどな。」
昨日、志保から解毒剤の目途がついたことに全員が歓喜したわけであるが、それにしたって、まだ4日はかかるのだ。
それまで相手が待ってくれるだろうか？それが気になるのだ。
平次
「あのな、ちょっと思いついたことがあるんやけど。」
2人（コナン・快斗）
「！？」

３日後
阿笠邸には６人の人間の姿があった。
コナン、平次、快斗のお馴染の３人に、阿笠博士。そして、本山と養女の香代子であった。

打開策（後書き）

というわけで、２５話です。
次話では平次が考えた打開策が明らかになります。

計画披露

都内某所ＣＩＡ本部
高野
「南雲部長！！」
南雲
「何だ？騒々しいぞ高野。」
わめき散らしながら入ってきた部下に、南雲は注意する。しかし、その部下である高野はそんなこと聞いてませんと言わんばかりに喋り始めた。
高野
「わかったんですよ！」
わかっただけでは要領を得ない。
南雲
「何が？」
高野
「はい。実はもぐりこませている工作員の角田からの報告なんですが、実は・・・・・・・・」
彼は部下の報告を、南雲部長に報告する。
南雲
「ほほう。その阿笠博士に出入りしている本山という男がねえ。」
彼が受けた報告には、本山が上社の血縁者である事。そして、彼が養女として引き取った少女が、記録に残されている上社博士の娘に酷似していること、であった。
南雲
「つまりその少女はあの装置に入っていた。それを見つけたのが工藤新一であり、そして血縁関係を突き止め、本山に養女として引き取ってもらった。ということかね？」
さすが敏腕工作員、大まかな点は当たっている。

高野
「本山を始めとする人間に関する報告書はこちらです。」
そう言って彼は資料を差し出した。
南雲
「おい！！まだあるのかね？もう広辞苑以上の厚さになっているぞ！！」
そう言って、彼は積まれた書類を指差した。
高野
「彼らに関する報告はそれこそごまんと出てきます。」
どこかで見たことあるやり取りをしながらも、南雲は話題を切り替えた。
南雲
「で・・・・・・君としての意見は？」
高野
「そうですね・・・・その少女が情報を持っている可能性は高いです。ですから、彼女を拉致して、自白剤を打って洗いざらい喋ってもらって、その後忘却剤を打って全て忘れてもらい、元の場所に戻せばいいでしょう。うん、それなら完璧だ。」
っておい！相当危ないぞそれ！
さすがに、南雲もそれくらいはわきまえている。
南雲
「おいおい。民間人相手にそんなことできんよ。そんなことは許さん。とにかく、装置をどこかに持ち出されるのは厄介だから、彼らへの見張りを増やすんだ。場合によっては、・・・・・・分かりやすい恫喝でもしてやりたまえ。ただし、死傷者が出ることは許さんぞ！！」

ＣＩＡで物騒な話題が話し合われている頃、阿笠邸でも重要な話し合いが行われていた。

香代子

「特許？東京特許許可局の？」

平次

「そや。その特許や、あの機械の特許を取るんや。」

訳が分からないと言う顔をする香代子を前に、平次は前日コナンたちに言った考えを披露した。ちなみに、コナンたちは香代子に重力炉が狙われていることを伝えてある。

平次の考えは、重力炉に関する特許を取るという簡単な物であった。成るほど、これなら他者の使用を制限できる。簡単だが手っ取り早いとは言える。これなら原理に関しても、発見者の自由で発表しなくて良い。

平次

「問題はな、その特許を取る名を誰にするかや？」

確かに、発明者である上社大佐は既になく、かといって娘の香代子はいくらなんでも若すぎる。また彼女の義父である本山は、彼自身が畑違いの発明品の特許を取る事を渋った。となると、残るは。

コナン

「俺たちは、博士の名義で取るのが一番だと思っているんだけど・・・・」

ここから先はコナンにも上手くいえなかった。彼女にとって父親

が残した唯一の物を手放せと言っているからだ。
だが、彼女はほんの少し思案顔になったが、こう答えた。
香代子
「それで良いです。」
あまりに簡単に言ったので、全員が驚いた。
快斗
「本当にそれでいいのかい？」
念押しの為、快斗がもう一度聞いておく。
香代子
「いいです。阿笠さんとはほんの数回しか話はしていませんが、悪い人には見えません。それに、父の機械を正しく使ってくれると信じています。」
しばし全員無言になった。
およそ1分後。
本山
「そうとなったら、行動を起こしましょう。早い方が良いでしょう。私も出来る限りの協力をさせてもらいます。」
こうして、彼らは動き始めた。見張られていることから、全員が下手なことは出来ないと考えていた。そして、それを証明するように、この日の夜、ＣＩＡからの脅迫電話が掛かってきた。

計画披露（後書き）

というわけで、次話からコナンたちとＣＩＡの駆け引きが始まります。

暁の出発

都内某所

高野
「連中はどうやら行動を起こすようです。」
南雲
「それはこちらがした脅迫電話の影響かな？」
高野
「それはなんとも・・・・・ただあちらさんが急遽軽トラックを借りたり、工藤新一達の阿笠邸への出入りが急増しているのは確かです。」
それは、工作員がもたらした最新の情報であった。
南雲
「それで・・・・君としては何か策があるのかね？」
高野
「脅迫しても動じないのであれば、実力行使に出るまでです。私が米花町へ行って直接陣頭指揮を執ります。」
南雲
「あまり手荒にやらんでくれよ。我々は最悪、連中があの装置を・・・・・・・いや、なんでもない。」
高野
「・・・・・」
何かを言おうとして南雲は言うのをやめた。また、高野もそれを詮索しなかった。

翌日早朝　米花町　阿笠邸
この日、暗いうちから博士と、本山の2人がなにやら大きな機械を、借りてきた軽トラックに積み込む作業をしていた。
それを、コナンたち3人が見守っていた。
快斗
「うあつら、こんなことでひっかかるかな。」
コナン
「多分引っかかるぜ。向こうが脅迫電話をしてきたってことは，それだけ焦っている証拠さ。」
コナンは自信満々だった。別に自意識過剰というわけではない。ただ負けないと漠然と思えるだけなのだ。
平次
「それはそうと、結局間に合わんかったな、アホトキシンの解毒薬。」
快斗
「それを言うならアポトキシン。」
未だに言い間違える平次に、快斗は少しうんざりしながら言った。
平次
「別にええやん。」
快斗

「平次、言わせて貰うがお前のその大雑把なところ、探偵としての資質を疑うぜ。」
平次はこの言葉に、カチンと来た。
平次
「なんやと！！もういっぺん言ってみ！！」
快斗
「何度でも言ってやるぜ！！」
こうして2人はいがみ合いを始めた。
コナンは付き合いきれんと思い、とりあえず少し距離を離す。
そこで、ようやく志保のことが気になった。
（あいつ、徹夜ばかりしていた見てえだけど、体大丈夫か？）
そう思い始めると、悪い予感もしてくる。そこで、彼は阿笠邸の中に入り、地下の研究室へ向かった。
（明かりが点いてる！？）
扉の間から明かりが漏れていた。
コンコンとノックしてみる。しかし、返事はない。
扉を開けると、机に突っ伏している志保がいた。近づいているとかわいい寝息を立てているのがわかった。どうやら、研究中に眠ってしまったようだ。
コナン
「ったく、寝る時はベッドで寝ろよ。」
そう言いつつも、彼は彼女に毛布をかけてやる。
と、そこで机の上に数錠のカプセルがあるのに気づいた。恐らく、先日彼女が言っていた解毒剤の試作品だろう。
あれから、特に薬が失敗だったとは聞いていない。彼はそれを掴み取るとポケットに入れた。何かの時に役に立つかもしれない。無断使用はいけないとは思うが、まちに待った物を前に、はやる心を抑え切れなかった。
部屋を出て行こうとしたとき、彼は何もしないでは彼女が驚くと思い、近くにあった紙に書き置きを残し、そして部屋を出た。

外に出ると、博士が待っていた。
博士
「おお新一。準備できたぞ。」
コナン
「よし、じゃあ行くか。」
そして博士は愛車のワーゲンに、本山とコナンは軽トラに乗る。
と、ここでコナンは未だに平次と快斗が喧嘩しているのに気づいた。
コナン
「おめえらいい加減にしろ！置いてくぞ！」
すると、2人とも我に帰った。
快斗
「あ、待てよ！！」
平次
「工藤！薄情なことするなや！」
慌てて2人も軽トラに乗り込んだ。
コナン
「ようし。博士いいか？」
無線機で後ろのワーゲンに乗る博士に交信する。
博士
「おお、いいぞ新一。」
本山
「よし、じゃあ行くぞ。」
こうして、一行は出発した。

追跡

栗田
「高野班長、連中動き始めました。」
モニターを眺めていた部下の１人が言った。
高野
「発信機に異常はないな？」
栗田
「もちろんです。」
実はＣＩＡは秘密裏にコナンたちが乗っている車に発信機を仕込んでいたのだ。
高野
「そろそろ例の仕掛けが効きだす頃だな。」
腕時計を眺めながら、彼はそう漏らした。

一方、こちらは発信機を仕掛けられた事に気づいていないコナン

たちの方。
本山
「尾行してくる車はあるかい？」
本山が隣に座るコナンに聞いてみる。
コナン
「いや、特に怪しい車はついてきていないけど。」
バックミラーを見ながらコナンは言った。
予想外の静けさに、コナンも少し不安になってきた。
そこで、ワーゲンに乗り換えた平次に探偵団バッジで連絡を取ってみる。
コナン
「こちらコナン。服部、そっちに尾行している車いるか？」
平次
「こちら服部。いや、おらへん。」
そっけない返事が帰ってきた。
コナン
「わかったありがとう。・・・・・変だなあ・・・」
快斗
「何か嫌な予感がするな。」
コナンの隣に座っている快斗が言う。
2人とも少し不安になってきた。そして、その不安は的中した。
突然、軽トラの動きが変になった。
コナン
「何だ？」
本山
「わからない。エンジンの出力が落ちている。」
そして、しばらくして完全に軽トラは止まった。
本山
「どうなってるんだ！？」
本山は車から降りると、エンジンカバーを開けた。

本山
「な！？」
彼は絶句した。
コナンも降りてみてみる。そして原因がわかった。完全にエンジンが焼き付いたのだ。
本山
「しまった。燃料タンクに何か不純物を混ぜられたな！」
その意味を、コナンも理解した。恐らく、燃料タンクに砂糖か何かを混ぜられ、それによってエンジンが焼き付いたのだ。
そして、悪いことに悪い事が重なる。
軽トラから降りた快斗がそれを見つけた。
快斗
「これってもしかしてさ・・・・」
慌ててコナンと本山が近寄る。
コナン
「十中八九、発信機だな。」
本山
「どうりで尾行がないはずだよ。こっちの動きは筒抜けだったんだからな。」
2人とも冷静に言うが、切羽詰った状況であるのは確かだ。
と、そこでさらに快人があることに気づいた。
快斗
「あと、予想外の人間が居るぞ！」
2人（コナン・本山）
「「え！！」」
軽トラの荷台には、囮の段ボール箱が乗せてあったのだが、その中から2人の人間が現れた。
コナン
「蘭！！」
本山

「香代子！！」
なんと蘭と香代子が密航していた。
コナン
「お前、何でここに！？隠し通せたんじゃ？」
その言葉に、蘭は勝ち誇った顔をして言った。
蘭
「なめてもらっちゃこまるわ。新一の様子がおかしい事ぐらいすぐに分かるわ。それで、阿笠博士の家に来ていた香代子ちゃんに聞き出したわけ。」
恐るべし、蘭。
快斗
「あのもしかして青子にも？」
快斗が恐る恐る聞いた。
蘭
「もちろん。青子ちゃんも和葉ちゃんも知っているわよ。２人は今頃阿笠博士の車の中よ。」
この時２人は、彼女達に隠し事は出来ないと悟った。
蘭
「全く３人とも、こないだあんなことしたばかり・・・」
怒り始めた蘭を、本山が制する。
本山
「ああ、毛利さん。そういう小言は後にしてくれないかな。今は一秒を争う事態だから。」
本山がうんざりしながら言った。まあこんな状況なのに、２人も女の子が付いて来ているのだから、溜息のひとつもしたくなる。
コナン
「そうだよ。おそらく、連中は直ぐにここに来るぜ。早く移動しねえと・・・」
と、そこで彼自身あることに気づいた。
コナン

「ところで、ここどこ？」
そういえば、住宅が周りに見えない。しかし、見覚えはある。彼は記憶の糸を辿ろうとする。しかし、彼が思い出す前に、蘭が先に答えを言った。
蘭
「あ、思い出した。ここ、こないだ来たわ。雷神社のすぐそばよ。」

追跡（後書き）

作中に登場した砂糖による破壊は昔フランスでレジスタンスがやっていた方法です。実際に、車のガソリンタンクに砂糖入れると焼きつきますよ。

再進入

栗田
「発信機の反応が停止しました。」
高野
「位置は？」
栗田
「Ａ（軽トラ）は雷神社の側（そば）です。Ｂは米花五丁目にて停止中。予定どうり、エンジンが焼きついたものと思われます。」
高野
「トラックの方を追えばよい。車は無視しろ。」
その言葉に、側にいた別の部下、小沢が声を上げた。
小沢
「いいのですか？もう一台の方を追わなくて？」
部下の危惧を、高野は笑って却下する。
高野
「もう一台には人間しか乗っていない。関係ないだろ。」
しかしこれが、後に彼にとって大きな失敗となる。まさか彼らは、コナンたちの目標が装置の持ち出しではなく特許の取得であるとは予想もしていなかった。

では、追われているコナンたちはどうしていたのか？
コナン
「・・・・・・うん・・・・・・わかった。後は頼むぞ。」
コナンは探偵団バッジの電源を切る。彼は平次と連絡を取っていたのだ。
蘭
「服部君なんだって？」
コナン
「向こうもエンジンが焼きついたって。で、電車に乗り換えるってさ。」
罠に掛かったのはコナンたちだけではなかったのだ。
本山
「けどどうするんだね工藤君。囮の役目は果たしたかも知れないが、連中直ぐに追いかけてくるぞ。」
実際本山の危惧しているとおり、ＣＩＡは目前に迫っていた。
コナン
「とにかく逃げないと。」
快斗
「けど、どこに逃げるんだ。」
そう、それが問題であった。実はここに来るまではずっと一本道であった。つまり、このまま戻っていけば敵と鉢合わせという最悪のシナリオが待っていることになる。となれば・・・
コナン
「進むしかねえだろ。」

というわけで、彼らは進み始めた。
しかし、道は約３００ｍ行ったところで途切れた。
快斗
「俺たちは袋のネズミになったのかよ。」
御名答。
蘭
「ちょっと新一、なんとかしなさいよ。」
と彼女がいうものの、いくらなんでもそうそうアイデアが出るものでない。
皆が悩む中、提案したのは香代子であった。
香代子
「ねえ、ここって研究所のすぐ側よね。あそこに隠れられないかしら？」
その意見に、快斗が難色を示した。
快斗
「それこそ本当に袋のネズミにならねえか？」
確かに、その可能性は大いにありうる。なにせ行き止まりの洞窟の中に入るのと同じなのだから。しかし、それに対しコナンが反論した。
コナン
「いや、俺たちはとにかく博士が特許庁に入る時間稼ぎをすればいいんだぜ。連中は車の位置は分かっているけど、俺たちの位置はわかってねえから、時間的な余裕は充分あるんじゃねえか？」
こちらもそれなりに筋は通っている。
結局のところ、多数決でコナンの案にすることが決まり、彼らはあの旧日本軍の基地跡にもう一度足を踏み入れる事となった。
入り口はしーんとしていた。既に自衛隊の不発弾処理も終わっている。ただ、まだ立ち入り禁止の立て札などはなく、楽に中に入れた。
真っ暗ではあるが、それは４人（蘭と香代子も博士から貰ってい

るので）が腕時計型ライトを使用したので、なんとかなった。
一番奥の部屋に着くと、全員一息付く。
快斗
「やっと着いたは良いけど、これからどうするかだ。」
本山
「そうだね、黒羽君の言うとおりだ。」
なんにもない地下の穴の中。無線も届かないから外の状況さえわからない。
と、そこで香代子がこんな言葉を口にした。
香代子
「あの壁さえ壊せれたらね。」
あの壁とは、通路の奥に後付で作られたと思われる壁である。
蘭
「え！？何か向こう側にあるの？」
香代子
「まあ皆だったら驚くと思うよ。」
そう言われると、その場の全員興味がわいてきた。
快斗
「そういえば、前来たときどこかの部屋にツルハシが落っこちてたような気がするけど。」
快斗が思い出したことを言う。早速、探してみると、出てきた。
どうやら自衛隊も置き去りにしたらしい。
というわけで、大人である本山がそれをつかって壁の破壊を試みた。
すると、いとも簡単に壊れた。どうやら粗悪なコンクリートで使われていたらしい。
そして、５人は壁の向こう側に進んだ。

再進入（後書き）

彼らが壁の向こうで見たのは・・・・・・・

さて、なんでしょうか？

皆さんの意見お待ちしています。

遺物

壁の向こう側に行くコナンたち。しかし、暗くて何があるかよくわからない。腕時計型ライトで照らしても、相当大きな空間のせいか、よくわからない。

コナン

「一体なんなんだここ？」

香代子

「あ、そういえばあそこに照明の電源があったんだった。」

そういいながら壁に近づく香代子。しかし。

快斗

「ちょっと香代子ちゃん。６０年前も機械が動くはずがないよ。」

もっともな事であるが、しかし香代子は聞いているのかいるのかいないのか、壁の一箇所に近づいていく。

香代子

「あ、あった。」

お目当てのものを見つけたらしい。彼女はそれ、レバーを力いっぱい上げた。

すると、天井の明かりが次々とついた。

快斗

「嘘！！」

驚く快斗を尻目に、照明は空間を照らし出す。そこに、現れたのは。

全員（除く香代子）

「戦車だ！！」

彼らの目の前には、キャタピラを付け、車体を迷彩色に塗った鉄の塊があった。

香代子

「いいえ、これは戦車じゃないわ。厳密には九七式軽装甲車、通

称テケ車よ。」
蘭
「テケ車？」
九七式ほにゃららと言われてさえよく分からないのに、さらにテケ車といわれ、蘭の頭に？マークがいくつか浮かぶ。
香代子
「テは偵察。ケは軽装甲車のことよ。もっとも、兵隊さんは豆タンクって言っていたけど。」
さすがにここに出入りしていたおかげか、彼女はこういう物について詳しいようだ。
蘭
「そう・・・・九七式ってことは１８９７年に作られたの？」
軍事用語ばっか連発されたので、話題をずらそうとする蘭。
しかし、香代子はさらに得意げに話し始めた。
香代子
「違うわよ。９７は皇紀２５９７年のこと。昭和に直せば１２年よ。」
蘭の頭の？マークはさらに増えた。まあ平成世代の女子高生が皇紀を知っている方が珍しいだろう。
そんな彼女を見かねてか、快斗がさらに別の話題を持ち出す。
快斗
「あのさ、何でここにこんな物があるの？」
香代子
「だって、ここは装甲車の駐車場だったもん。あって当然よ。」
と、香代子は笑いながら言う。
（女の子がそういうこと笑いながら言うもんか？）
と心の中で思う快斗であった。それと同時に、もう１つ別な事に気づいた。
快斗
「あれ、新一と本山さんは？」

いつのまにか2人がいなくなっていた。
蘭
「2人ならあの戦車調べているわよ。」
蘭が指差す方向を見ると、2人が装甲車を調べていた。
快斗
「ったく、調べたって60年前の物だろう。ただのガラクタだろう。」
そう言いつつも、彼も軽装甲車に近づく。その時にはコナンは車体に入ったのか見えなくなっていた。
快斗
「おおい、新一。調べてどうすんだよ。ただのガラクタだろう？」
しかし、その後車体のハッチから顔を出したコナンの回答は意外な物であった。
コナン
「驚いたぜ。この装甲車、確かに相当古い型だけど、中は綺麗に整備されているぜ。」
快斗
「！？」
快斗も慌てて近づいてみる。確かに、車体にはサビ1つ浮いていない。まるでつい最近まで誰かが整備していたようだ。
さらに、本山がエンジンカバーを開け中に見てみると、さらに驚く内容がわかる。
本山
「こいつはすごい。ちゃんと油は差してあるし、燃料も満タンだ。それにどこも錆びていない多分動くよこれ。」
すると、その言葉に反応したのか、香代子が何か探し始めた。
蘭
「香代子ちゃん何探してるの？」
香代子
「エナーシャ。あ、違った始動転杷。」

またまた専門用語を連発する。
結局、意味がわからない蘭は、香代子の行動を傍観するしかない。しばらくして彼女は壁際に捨てられていた金属の工具みたいな物を手に取った。
そして、装甲車の元に行くと、本山に渡して、それを指して回してもらう。そして、ハッチから彼女は装甲車の中に入った。そして、およそ1分後、エンジンがかかり、あたりにディーゼルエンジンのアイドリング音が響いた。。

遺物（後書き）

皇紀というのは、神武天皇が即位したのを０年とした暦です。ちなみに今年は２６６７年です。

追手

コナン
「動いた。」
まさに奇跡。まさか、６０年前の装甲車が動くなんて。
快斗
「他のも動くのかな？」
快斗は周りをぐるりと見回した。実は車両はこれ一両だけではなかった。周りには他に４，５両の車両があった。
本山
「じゃあためしに他の車両も動かしてみるか。って、香代子。なんでそんな遠巻きに見てるんだ。」
エナーシャを渡した後、何故か彼女は装甲車に近づこうとしない。
香代子
「だって、戦車に女は乗っちゃいけないんでしょ。」
全員
「え！？」
全員が香代子の発言に目を剥いたが、これはどうしようもない時代のギャップである。実は戦前女性は、江戸時代から続く男女完全分業の考えの下、銃後の生活を守る者と位置づけられていた。それによって、女性の社会進出は遅れたわけだが、取り分け軍隊は顕著で、８０年に及ぶ帝国陸海軍の歴史の中で、女性を軍人として登用した記録はない。
女は乗せない戦車隊♪　などという戯れ歌まで存在したぐらいである。女性が武器を触る事さえ許されなかったのだ。
戦局が厳しくなり、人手不足になった太平洋戦争末期でさえ、軍属（軍で働く民間人のこと）として働くのが最高階級であった。同時期に米英露独等の国が女性軍人を登用していたのとは大違いである。ロシアに至っては女性のエースパイロットさえいたというのに。

ちなみに、現代の自衛隊にはもちろん女性自衛官はいる。その中にはパイロットや戦車兵だってちゃんと存在している。

本山

「あのね、今はそんな事気にしなくて良い時代だから。もっと近寄ってもいいよ。」

さすがに、時代のギャップがほんの数日で埋まれば苦労しない。少しずつ慣れてもらうしかない。そう思いながら彼はそう言った。

その後、コナンたちは他に置かれている戦車などを調べてみた。すると、先に見つけた装甲車同様、整備され、エンジンが動く車両が何両か存在した。

快斗

「どうなってるんだ。どうして６０年以上前に捨てられた戦車が動くんだ！？」

コナン

「はっきりしているのは、誰かがつい最近までここで整備していたってことだな。」

本山

「けど一体誰が？」

と、そこで蘭が気づいた。

蘭

「そういえば、高木刑事が・・・・・」

蘭は先日高木刑事から聞いた怪しいトラックの話をした。（詳しくは第９話参照。）

コナン

「じゃあそのトラックが。けど、それだけじゃどこの誰かまではわからねえな。」

いくら名探偵でも、情報が少なくてはなんにもならない。

快斗

「まあそれは後で調べればいんじゃないのか。」

と、快斗がそう言った時である。

？
「いたぞ！！！」
男の声が響いた。
全員が入り口の方を見ると、背広にコートを着込んだいかにもな男が数人立っていた。
２人（コナン・快斗）
「何！！？？」
まさかもう見つかるとは思ってもいなかった２人。
そして、その男たちの１人が懐から何か取り出すのが見えた。
コナン
「みんな戦車の陰に隠れろ！！」
そう言うより早く。
バンバン！！
発砲音が連続して響いた。
コナン
「無警告で撃ってきやがった！」
快斗
「あいつら俺たちを皆殺しにするきか！？」
実際の所、彼らの想像はほぼ当たっていた。実は、このコナンたちを追っていた高野率いる追跡班は、乗り捨てられた軽トラの荷物がダミーであることが分かり、なおかつ阿笠博士の方が本命であり、既に手遅れである事を知らされ、怒り心頭に達していた所なのだ。
彼らにしてみればもう憂さ晴らしである。例え殺しても、役所に掛け合って本人が生きていた証拠を消し、「そのような人物はいません。」にすればＯＫとでも考えたのだろう。
まあ撃たれ、殺されるほうはＯＫではないが。
カンカンと銃弾が戦車や装甲車に当たる音がする。ちなみに、日本の戦車は最大装甲が１３ｍｍから２５ｍｍの厚さしかない。だから車体の陰に隠れても、もしかしたら銃弾が飛んでくるかもしれない。

コナン
「畜生！どうしたらいんだ！！」

エースパイロット・・・・・5機以上の敵機を撃墜したパイロットに与えられる称号。

追手（後書き）

というわけで３１話です。もうコナンじゃないじゃん！などというお叱りを受けそうですが、まだこのシリーズは続くので、よろしくお願いします。読者の皆様。

戦闘！

香代子
「キャ！！」
兆弾が彼女の側で弾けた。
蘭
「大丈夫、香代子ちゃん！？」
蘭が駆け寄る。見ると、彼女の腕の服が引きちぎれている。その下には傷が出来、血が流れていた。
それを見て、この上ない怒りを覚えた者がいた。
本山
「野郎！！許さん！！」
義父の本山だ。
彼は叫ぶなり装甲車の車内に入った。そして、何かを探し始めた。
本山
「砲弾はどこだ？」
なんと装甲車についている３７ｍｍ砲を撃つ気だ。
本山
「あった！」
ついに砲弾を探し出した。それを砲に入れる。そして尾栓（砲の最後尾についている栓）を閉める。さらに、砲を回し、ハンドルを使って砲身を相手に向ける。
本山
「よし。発射装置は？これか！」
それらしき引き金を見つけた。
そこで、一端ハッチから身を出す。
本山
「みんな目をつむって、耳を塞げ！！」
全員

「え！！？？」
全員が目を丸くする中。彼は車内に戻った。
本山
「喰らえ！！」
彼は引き金を引いた。
６０年前の弾が出るか心配だったが、それは杞憂だった。弾はちゃんと発射された。紅の火炎と轟音を発して弾が発射された。
蘭
「キャア！！」
コナン
「うわ！！」
快斗
「うお！！」
まさか撃つとは思っていなかった3人が驚きの声を上げた。
しかし、その後起こるはずの砲弾の爆発がない。
本山
「あれ？」
照準器を覗くが、相手に異常は全くない。
本山
「不発か？」
その時、上から声を掛けられた。
香代子
「お父さん。それ撤甲弾よ。」
本山
「何！？」
さすがに年齢を重ねているだけ合って、撤甲弾の意味はわかる。
撤甲弾とは厚い装甲をぶち抜くため、信管の反応が鈍い。だから、地面などに向かって撃つと不発弾が出ることがある。
であるから。
本山

「榴弾はどれだ！？」
榴弾とは破片で車両や人員を傷つける砲弾だ。爆発力も強い。
香代子
「これよ。」
彼女が指差したのはさっきとは違う色が塗られた砲弾であった。
本山
「よし。」
彼はその砲弾を装填した。
本山
「撃て！！」
再び引き金を引いた。
先ほどと同じように弾が発射された。そして、その弾は敵の近くで弾けた。しかし、相手も通路に引っ込んだ為、けが人や死者は出なかった。
本山
「あ、畜生！！」
と、そこでさっきとは違う声が掛けられた。
コナン
「本山さん。あんたなにやってんですか！？」
と、そこで彼もやっと冷静になった。
本山
「あ、ごめん。」
コナン
「ごめんで済む問題じゃない！！」
確かに、危うく人が死ぬ所だったのだ。冗談では済まない話である。
快斗
「それよりさ、まずいんじゃないのあれ。」
2人（コナン・本山）
「え！！」

2人が、快斗が指差した方を見ると崩落した入り口があった。どうやら砲弾の爆発の衝撃が原因のようだ。
蘭
「ちょっとどうするのよ！！」
コナン
「本山さん！！」
本山
「・・・・・・・アハハハ！」
2人（コナン・蘭）
「笑ってすむ問題じゃない！！」
そう、彼らは完全に閉じこめられたかもしれないのだ。
しかし、そこで幸運かまたも香代子があることを思い出した。
香代子
「そういえば、反対側の壁にも通路があるわ。」
全員
「え！！」
全員が逆側の壁に走った。そして。
蘭
「あったわ！」
蘭が見つけた。確かに、人2人分ほどの広さの通路があった。
コナン
「ねえ香代子ちゃん。この通路はどこに続いてるの？」
香代子
「わかんない。ここからは奥に入ったことないもん。」
彼女はぶんぶん首を振るだけだった。
快斗
「とにかく行ってみようぜ。」
こうして彼らは再び未知の空間に足を踏み入れていった。

模索

一行は暗い通路を歩いて行く。

コナン

「一体何処へ続いてるんだ？」

快斗

「もしかしたら地球の裏側だったりして。」

場の雰囲気を和ますためか、快斗が冗談を言う。

蘭

「けど米花町にこんな大きな洞窟があったのをどうして誰も気づかなかったのかしら？」

実に鋭い質問と言えよう。

コナン

「さあ。知ってる人間がいなかったからじゃないかな？」

本山

「あるいは知っていたがその存在を隠したかだな。ほら、戦争犯罪を隠す為に口裏合わせて黙るってことあるじゃないか。」

それを聞いて、コナンもなるほどと思った。

快斗

「そういえば、トンネルの上にある土地は値段が下がるって聞いたぞ。もしかしたら地価の暴落を防ぐ為に、見てみぬふりをしたかも。」

３人はそれぞれの考えを言うが、真実は闇の中。

そうこうしているうちに出口に着いた。しかし、真っ暗で何があるかわからない。そこで、全員総出でまたも照明をつけるスイッチを探す。

一方、コナンたちとわかれた平次はと言うと。
無事特許庁に申請を終えてはいたが、和葉と青子の攻撃を受けていた。
和葉
「このドアホ！！」
平次
「アホ言うんやない！！」
和葉
「何をいうんやアホ平次。この間あんな事してまだしたりんかい！！」
案の定平次が危険な事に首突っ込んだ事におかんむりらしい。
平次
「だからあやまっとるんやないか！！このボケ！！」
売り言葉に買い言葉、喧嘩がおさまる様子はない。
青子
「ねえ平次君、それよりも快斗はどこよ。バッジで連絡してもでないし。」
平次
「ああ、俺もそれが・・・」

言いかけて和葉が割り込む。
和葉
「平次！！人の話はちゃんと聞き！！」
そうは言われても、彼とて聖徳太子ではない。７人の話を同時に聞くなど不可能だ。
平次
「だああ！工藤、快斗、なんとかしてや！！」

コナンたちが命の聞きにあるとも露知らず、結局このバカ騒ぎはこの後、延々３時間も続くことになる。

そして時系列は再びコナンたちのもとに戻る。
ようやく、照明のスイッチを見つけ、コナンたちは明かりを手にしたが、それに照らされたのは。
全員
「飛行機だ！！」
なんとそこには、２０機近い飛行機が整然と並べられていた。しかも現代の飛行機ではない。頭にプロペラをつけ、濃い緑色に塗装され、そして翼と胴体には日の丸が描かれていた。
快斗
「すげえ！戦争映画で見た飛行機みたいだぜ！」
快斗が一機に近づいてみる。
手のひらで機体の表面を触る。
快斗

「こいつは本物だ。」
映画で使うような木製の張りぼてではない、アルミで出来た正真正銘の本物だ。
蘭
「これ飛ぶの？」
蘭に言われ、コナンたちが早速調べにかかった。
凡そ１０分ほどして、機体を調べていた３人が顔を合わせる。
快斗
「機体の外見を見た限りじゃ特に錆付いていないぜ。」
本山
「エンジンもさっきの装甲車と同じだ。まるでつい最近まで誰かが整備していたようだ。」
コナン
「燃料も満タンだった。」
まあ簡単に言えば、飛べそうである。
香代子
「じゃあこの飛行機で逃げちゃえばいいんじゃないかな？」
香代子が提案するが。しかし。
蘭
「けどどこから飛ぶの？それに誰が飛ばすの？」
香代子
「あ！！」
実はこの洞窟、確かに飛行機を納めるだけの容積はあった。しかし、後ろは壁。前は大きな鉄板の扉で塞がっていた。
それに加えて、飛ばすパイロットがいない。本山は飛ばせないし、飛ばせる二人は幼児化しているから操縦なんて不可能である。
その時、コナンは思い出した。ポケットに入れた、解毒剤の存在を。
それを取り出す。
コナン

「こいつを飲めばなんとかなるかも。」

模索（後書き）

コナンは薬を使うのか？そしてどう脱出し追っ手を撒くか？次回もお楽しみに。

希望

コナン
「飛ばす事なら出来ると思う。」
全員
「え！？」
コナンのその言葉の意味を最初誰も理解できなかった。
コナン
「俺はハワイでセスナ機の操縦を習ってる。同じプロペラ機を操縦する事は出来ると思う。」
快斗
「それだったら俺だって出来るぜ。あのな新一、そうじゃなくて今は俺たちは子供の体だってことを忘れてるんじゃねえよな。」
まさか彼もコナンが解毒剤を持っていることまでは知らない。
コナン
「わかってるよ。実は・・・・」
コナンは快斗に志保から解毒剤を勝手に失敬してきた事を話した。
快斗
「なるほど、つまりその薬を飲めば元に戻れるってわけか。」
これで、操縦する人間についてはクリアしたことになる。しかし、もう一つ難問が残っている。
本山
「けど飛行機を飛ばす人間がいても、飛ばす場所があればの話じゃないかな？」
さすがに大人であるだけに、本山がそこを指摘する。
洞窟事態の長さは凡そ３００ｍ。横幅が２０ｍ程である。距離としてはギリギリ飛べない事もないが、肝心の出口がない。
本山
「戻るしかないんじゃないかな？」

しかし、戻っても通路を自分で埋めてしまっているので、戻りようもない。
コナン
「万事休すか・・・・」
コナンとしてもどうすればいいのかわからない。
心の中に『絶望』の二文字が浮かんでくる。
そこへ、女神が声をかける。
蘭
「新一！あなた、黒の組織だって倒したんでしょ！今まで色んな事件を解決してきたんでしょ！！新一はどんな時でも諦めなかった。だから、そんな弱気にならないでよ。」
そこでコナンも思い出した。今護るべき人が目の前にいるのを。愛する人が目の前にいるのを。
コナン
「そうだった。ごめん蘭。そうだ、俺たちは必ずここから出るんだ。」
その言葉に、蘭が微笑む。
蘭
「やっぱり新一はこうでなくちゃ。」
というわけで、希望を取り戻した名探偵の脱出の為の努力がはじまった。
快斗
「取り敢えず、あの鉄板は多分扉だから、あれが開くはずだ。」
洞窟の片側の終点は鉄の板で覆われているが、１枚の板で出来ている事からどうやら巨大な扉らしい。
本山
「けど、押してもビクともしなかった。錆付いているか、あるいは向こう側に何かあるか。なんにしろ大きな力が必要だ。その力をどうするか。」
考え込む４人。

香代子
「ねえ、あれ使えばいいんじゃない？」
４人
「え！！」
彼女が指差していたのは、飛行機の翼の下に吊られていた爆弾である。
本山
「なるほど、爆発の衝撃でこじ開ければ。」
快斗
「けど、外す時に爆発したら。」
香代子
「あ、それはないわ。普通こういう航空爆弾は、飛ぶ前に信管が入るようになっているはずよ。だから今なら爆発しないわ。」
さすが戦争中に生きていただけはある。
コナン
「よし、だったらやってみよう。」
こうして、爆破作戦が始まった。まず、爆弾を翼から外して台車の上に載せる。香代子の話では付いていたのは６０ｋｇ小型爆弾と言う。これを操縦席の投下レバーを押してまず外す。台車の上に載ったらそれを鉄板につける。
そして最後は仕掛けを作るのが得意な快斗が即席の導火線と発破装置を作った。
この作業に掛かった時間は延べ１時間という驚異的な速さであった。
快斗
「よし、やるぞ！！」
その瞬間、コナンは蘭に覆いかぶさり、楯になる形で彼女を抱いた。もちろん、爆風から守るためだ。
その時蘭の頬が真っ赤になったのをコナンは死ぬまで知ることはなかった。

快斗
「点火！！」
カチッという音とともに、爆弾が大音響を残して爆発した。
ズドーン！！
この爆発のとき怖いのは、爆弾の破片（スプリンターとも言う）である。それによって動脈を切られ死ぬと言う事もありえる。威力の強い爆弾なら爆風だけでも脅威である。
しばらく、全員その場に身を伏せていたが、しばらくして立ち上がる。
コナン
「やったか？」
果たして成功か、失敗か？

希望（後書き）

御意見・ご感想お待ちしています。

準備

扉は・・・・・・・・開いていた。爆発で開いた隙間から光が差し込んでいる。
コナン
「やった！！」
コナンと快斗、そして本山の3人が駆け寄る。
3人
「せーのーで。」
3人で力いっぱい扉を押す。すると、扉は完全に開いた。しかし。
快斗
「うわあああ！！！」
快斗の絶叫が響き渡る。なんと、扉の向こう側に地面がなかったのだ。
落ちそうになった快斗を急いで残った2人が引き上げる。
快斗
「た、助かった。一体何がどうなってるんだ！？」
何二が何だか訳が分からないと言った表情で彼は言う。
蘭・香代子
「だ、大丈夫？」
2人が慌てて走ってきて聞いた。
快斗
「ああ、何とか生きています。」
一方、そんな急死に一生を得た快斗を助けた二人は外を見ていた。なんとそこにあるのは大きな池であった。向こうの方に給水等が見える。
本山
「工藤君。ここ何処だかわかるかい？」
コナン

「多分。米花町の北にある貯水池だと思います。」
コナンには目の前の場所に見覚えがあった。
本山
「そうか。しかし、これじゃあ下には歩いて降りることは出来ないな。」
下は池の水がすぐ側に来ている。しかも、高さも１０ｍはありそうだ。
コナン
「これじゃあ嫌でも飛行機で飛ぶしかないですね。」

というわけで、彼らは空からの脱出を余儀なくされた。
しかし、まずコナンと快斗がもとに戻らないといけないのだが。
そうしなければ操縦する人間がいない。
しかし、２人が薬を飲む直前になって本山があることにきづいた。
本山
「君達服はどうすんの？」
２人ともしまったと思った。大人用の服はもっていない。まさかなしというわけにもいかない。
仕方ないので、慌ててそこらへんを探し回った。そしたらあった。しかし。
コナン
「あんまり着る気しねえ。」
快斗

「ちょっとなああ。」
と見つけた服を見て文句を垂れる2人。
しかし、他に着る物もない。
蘭の「着なさい！！」の一言で全て決まってしまった。
解毒剤を別の場所で飲み、女子たちの前に2人が戻る。
蘭
「新一似合ってるじゃない。」
香代子
「かっこいいですよ。」
新一
「そ、そうかな。」
女子の言葉に照れる新一。
彼が着ているのは、それこそ今では映画やドラマでしかお目にかかれない格好だ。真っ白な上下に、金のボタン、肩と襟には桜マークの階級章。純白の旧海軍第二種軍装だ。この服はお手本とした英国海軍の服に似せてあるだけにカッコイイ。さらに新一自身も体格が良いからカッコイイ2乗である。ちなみに、おそろいの帽子もちゃんと被っている。
それにくらべ、快斗は不運であった。
蘭
「それに比べて。快斗君には悪いけど。」
香代子
「やっぱりちょっと見劣りしちゃうな。」
2人が見つめる快斗の格好はというと。カーキ色の上下に黒のブーツ。星マークの襟章と肩章。旧陸軍の軍装だ。色と言い形と言い、新一の服と比べると余りに地味でダサい。それに陸軍はどちらかというと悪役のイメージが強い。
快斗
「俺も新一の方を着ればよかった。」
こんな時だから服なんかどうでも良いと思ったのが間違えだった。

快斗
「さあ服のことはもういいから飛行機を動かそうぜ。」
もう服のことで色々言われるのはごめんとばかりに、彼は行動を切り替えようとする。
しかし、新一は嫌味っぽく言った。
新一
「いやあ、さすがの怪盗キッドも服によって機嫌を損ねるのか。」
何か言い返してやろうとした時、香代子が口を挟んだ。
香代子
「あ、けど新一さんの服は少佐の服だけど、快斗さんのは大佐の服だから、快斗君の方がえらいわね。」
その言葉にちょっとだけ元気付けられた快斗であった。

準備（後書き）

というわけで、新一と快斗に旧軍の服を着てもらいました。絶対原作ではありえないと思って書いちゃいました。文句その他は一切受け付けないのでご了承ください。

新一達は早速、飛行機を飛ばす準備にかかる。まず、燃料が入っているかを確認する。使うとしたら並んでいる中で先頭にある機体が望ましいから、その機体を調べる。

エンジンが動ける状態にあるか、機体自体に致命的な損傷がないか、燃料が入っているか、操縦桿がちゃんと動くかをしっかり調べなくてはならない。でないと、どこぞの旅客機のように、胴体着陸なんてことになりかねない。しかも今回は６０年前の機体なのだ。それこそもしかしたら空中でエンジンが外れるなんて冗談にもならないことだって起きないとは言えないのだ。

調べるのは飛行機の操縦経験のある新一と快斗の2人組みである。

快斗

「新一、こっちの飛行機は動くぜ。操縦席に座ってみたけど異常はなかった。エンジンも見た限りじゃなんとかいけそうだ。」

快斗が目星をつけたのは一番前に止まっていた機体だ。香代子に聞いたところによると、それは機上作業練習機白菊というらしい。この機体なら3人は乗れるという。

一方の新一が目をつけたのは二番目に並ぶ複葉機（主翼が上下二枚ある飛行機。）であった。こっちも香代子から機体の名前を聞いていた。九三式中間練習機、通称赤とんぼ。確かにその名前にふさわしいようなかわいらしい機体である。

2人乗りで、コックピットは吹きさらしである。

元の機体は名前にあった橙色に塗られていたらしいが、今は濃緑色に塗られている。
新一
「こっちもだ。特に問題は見当たらない。」
新一が調べたほうも異常無しであった。
新一
「けどさ、俺たちの操縦で大丈夫かな。」
セスナ機の操縦を習ったとはいえ、やっぱりいざ飛ぶとなると、不安が心の中で湧き上がってくる。
それを察してか、快斗が新一の肩に手を置いて言った。
快斗
「大丈夫さ。なんて言ったって、俺たちは一緒にジャンボジェットを操縦したんだぜ。」
それはまだコナンと怪盗キッドの間柄だったころの話だ。（詳しくは銀翼の奇術師を見てください。）着陸させたのは蘭と園子だったが、機体を建て直し、着陸まで持っていったのは二人がいてこそ出来たのだ。
快斗がそのことを笑いながら言った。新一も快斗に言われると、なんとなく大丈夫だと思えてくる。
新一
「ふ。それもそうだな。よし、じゃあ最終点検だ。」
こうして、2人は準備を進めていく。

一方、それを蘭は見ているだけであった。彼女に出来る事はほとんどなかった。
そんな一人ぼっちの彼女に、香代子が声をかける。
香代子
「蘭さん。」
蘭

「え、あ、何？」
突然声を掛けたので、蘭は驚いてしまった。
香代子
「蘭さんは新一さんの恋人なんだよね？」
蘭
「え！？ま、まあそんなところだけど。」
蘭の顔が真っ赤になる。
香代子
「いいな。あんなカッコイイ人が相手で。」
羨望のまなざしで言う。
蘭
「香代子ちゃんは好きな人いたの？」
蘭としては６０年前に生きていた彼女がどんな好みをしていたか気になる。
香代子
「私は・・・・・そんな余裕なかった。毎日毎日勤労動員だったし。それに学校じゃ異性と付き合うことははしたない事って教えられたし。」
当時の教育では男女が付き合うことは厳禁であった。もしそれこそ並んで歩くだけでも注意を受けた。そういう時代であったのだ。
蘭
「そうなの。けど、今はそんな時代じゃないから。香代子ちゃんも青春楽しめば。」
蘭としては慰めのつもりで言ったようだが、彼女はそれに対し少し表情を曇らせた。
香代子
「楽しめればね。」
彼女はぼそりとそう言った。そして立ち上がって歩いていった。
その言葉には何かしら重い物が感じられた。かつてコナンや哀と話していた時と同じ感じがした。

それが何を意味するのか、蘭にはよく分からなかった。
だが、もし彼女がそれに気づいたらこう思っただろう。
彼女は何かを背負っている。

いよいよエンジンを始動させ、飛ぶ事となった。
新一と快斗が操縦席に納まる。
旧日本軍の機体の多くはエンジンを回す為に付けられる電動のセルモーターがないため、手動でエナーシャと呼ばれる始動用の機器でセルモーターを十分な回転数まで上げなければならない。
快斗
「本山さん。回して！！」
本山はエンジン下部にあるセルモーターを回す。
セルモーターが回転数を上げていく。
もうそろそろだと思えるたところで、
快斗
「離れて！！」
このままエンジンを回すとプロペラで巻き込んでしまうので、エナーシャを回していた本山はすぐに離れる。
快斗
「コンタクト！！」
接続という意味の言葉とともに、スタートボタンを強く押す。ちなみに、旧海軍では少しなまった「コンターック！！」という言葉を使っていた。
ちなみに、この言葉を快斗が知っていたのは、エンジン始動の手順を香代子から聞いたからだ。
最初、ババババという不整音が続く。
快斗

「だめか？」
６０年前のエンジンじゃ回らないと言う不安がぬぐいきれない。
しかし、すぐにエンジンは快調に回り始めた。
快斗
「よし。」
続いて、本山が新一と蘭が乗る赤とんぼの下に回る。そして先程と同じくエナーシャを回しセルモーターを回転させる。
新一
「よし。コンタクト！！」
エンジンが始動し、プロペラが回り始めた。
もっとも、エンジンが回っても直ぐに動かして言い訳ではない。冬に車のエンジンを温める為にエンジンをしばらくアイドリングさせるように、暖機運転を行わなければならない。それをしないとエンジンが焼きつくことだってありえる。
快斗
「じゃあ新一、先に行くぜ。」
エンジン音で聞こえないが、快斗は手を振ってそう言った。もっとも、新一も快斗の口の動きから言っていることはわかっていたが。
快斗ら3人を乗せた白菊が動き始める。エンジンの出力は最大。もしここで充分な揚力を得られないと、そのまま池へドボン！である。
白菊はスピードを上げていく。そして、トンネルの出口に差し掛かる。ここで快斗は操縦桿を引く。
白菊は一瞬沈み込んだが、すぐに高度を上げ始める。
快斗
「なんとか飛び立てたな。」
だが、そんなことを言っていられるのはわずか数十秒であった。
一方の新一たちは、快斗たちが無事飛び上がったとわかると、こちらも発進体勢に入る。
新一

「蘭行くぜ！！ベルトは締めたな？」
蘭
「もちろん。新一、ちゃんと飛ばしてよ。」
新一
「まかせとけって。」
会話は全て伝声管で行う。これは簡単に言えば糸電話と同じようなものだ。だが、これがないと会話は出来ない。
新一はブレーキをゆっくりと解除し、エンジンの出力を最大に上げる。
まず最初はゆっくりと、機体が前に進み始めた。
操縦桿とフットバーを使って機体の姿勢を調整しながら機を前に進めていく。トンネルの中だからコースアウトしたら最後である。
ノット表示のスピード計の針がどんどん上がっていく。
３０ノット、３５ノット、４０ノット
２００ｍも走らないうちに、機体がふわふわし始めた。
実は赤とんぼは風さえあれば７０から８０ｍ走れば飛び上がれる機体なのだ。だから、普通に走っていっても２００ｍあれば飛べる。
新一は浮かび上がろうとする機体を押さえる。
そして、出口に差し掛かる。車輪が地面を離れ、機体が一端沈む、新一は操縦桿を引く。すると、赤とんぼは上昇を始めた。
蘭
「やったわ！成功よ新一！」
蘭の無邪気な声が伝声管を伝わってくる。
新一
「ああ、あとは目的地まで飛んでいくだけだ。」
目的地は茨城の霞ヶ浦近郊にある小さな飛行場である。
そこまでの距離をなるべく人目に付かないコースを選んで飛ぶ事にしていた。

飛翔（後書き）

今回の話ではついに新一に飛んでもらいました。
彼らは無事帰り着けるのか？また、ＣＩＡの追跡を撒いたのか？
次回は２，３日後に更新します。

空戦

快斗
「新一！！上がってくるな！！」
新一
「え！？」
飛び上がった直後、無線機に突如快斗の叫び声が入ってきた。ちなみに、この機体に備えられていた固有の無線機はは完全にいっちゃっていたため、探偵団バッジを最大出力にして交信している。
蘭
「新一！快斗君の飛行機が！！」
伝声管から蘭の悲鳴に近い声がしてきた。
慌てて上空を見ると、そこには数機のヘリコプターに囲まれている快斗が乗った白菊の姿が。
新一
「しまった！！奴ら外で待ち伏せしていたな！！」
まさか外に出るのを待っていたなんて。もう諦めたとばかり思っていた。
蘭
「どうするの新一！？」
新一
「助けるに決まってるだろ！！」
蘭
「助けるってどうやって？」
新一

「こうやってだ！！」
そう言うよりも早く、新一はエンジンの出力を最大にして、操縦桿を引く。
途端に赤トンボは急上昇していく。新一は一機のヘリにぶつかりそうないきおいで飛ぶ。
蘭
「ちょっと新一！！ぶつかる！！」
新一
「大丈夫だ。」
あわや空中衝突寸前の所で相手がよけた。
新一
「よし、これでまず1機はもう追えない。」
蘭
「けど新一、こんなことしたら相手が怒らない？」
新一
「大丈夫だ。こっちは飛行機。相手はヘリコプター。絶対に追いつけない。」
普通ならそうである。しかし。
蘭
「新一！！追いつかれる。」
新一
「何！？」
振り返ると、確かにピッタリさっきのヘリコプターが付いてくる。
スピード計を見ると、今出ているのは１１０ノット（時速２００ｋｍ）出てるか、出てないかだ。
新一
「何で！！」
実際、ヘリなら２００ｋｍ前後出る。撒けるはずがない。
新一
「畜生！！」

操縦桿を左右に振り、なんとか撒こうとするが、付いてくる。新一としてはこれ以上無理な動作は出来ない。ただでさえ旧式の機体である。続けているうちに空中分解しかねない。後ろに乗っている蘭の体への負担だって計り知れない。ただでさえ、Gがきついのだ。

蘭

「新一！撃たれてる！！」

拳銃かライフルか、とにかく相手は何かで撃っているようだ。現に翼に穴が開いている。この機体の翼は布なのだ。簡単に穴が開いてしまう。

このまま撃たれ続けたら機体が持たない。

と、そこで香代子からこの機体に7，7mm機関銃が一基付けられているのを思い出した。

しかし、探偵として撃って良いのか？という考えが頭をよぎる。撃たれているのだからここで撃っても正当防衛である。しかし、人を殺す事はなんとしても避けたい。

そこで、新一はある行動に出た。

蘭

「新一！！」

新一

「蘭。これから宙返りするから歯をくいしばれ！！」

蘭

「え！？」

蘭が返答しないうちに、新一は宙返りを始めた。

赤トンボはかつて下手に飛ぶほうが難しいとさえ言われた傑作機だ。宙返りなど朝飯前である。

宙返りを終えると、相手が前にいた。

新一は機関銃の弾を装填し、照準を付ける。

そして。

ドドドドド・・・・・・

2秒間だけ連射。

相手はホバリング（空中での停止動作。）し始めたらしく。赤トンボは相手を追い越してしまった。
パッと見、相手に変わりはない。しかし、もう追いかけてこなかった。
蘭
「新一、何したの？」
新一
「エンジンを撃ち抜いたんだ。」
蘭
「ちょっと、そんなことしたら相手は墜落しちゃうんじゃ。」
新一
「大丈夫。ヘリコプターって言うのはエンジンが止まっても安全に着陸できる。」
蘭
「本当かな？」
未だ腑に落ちない蘭。
と、その途端機体がガクンと揺れた。
新一
「何だ！？」
新一は直ぐに異変の原因がわかった。エンジンだ。パスンパスンと音を立てている。
新一
「もしかして。」
慌てて計器盤の一つ、燃料系を見てみる。
恐れていたとおり、燃料系の針がゼロを指していた。

着陸

燃料が切れ始め、エンジンが息をつきはじめた。比例するように赤トンボの機体の速度と高度が下がっていく。

蘭

「新一、どうしたの？どんどんスピードが落ちてるじゃない！！」

新一

「燃料が、燃料がないんだ。」

新一も訳がわからない。確かに出発する時は満タンであった。なのに、まだ1時間ほどしか飛んでないはずなのに、どうして。

有り得ない事態である。

しかし、現実にはエンジンは今にも完全に止まりそうであった。

実は、新一には分からなかったが、エンジンが旧式化していたためと、最大出力にしてエンジンを長時間回した事が予想以上に燃料を消費していたのだ。

蘭

「どうするの新一！？」

新一

「どうするって言われても・・・・。」

蘭の悲鳴じみた問いに対し、しばし沈黙する新一。本当だったら、快斗と相談し決めた茨城県にあるセスナ機用飛行場に着陸する予定だった。しかし、眼下に目をやれば、米花町上空である。どうやらヘリと空中戦をしている内に、同じ所をグルグル回っていたらしい。

とても茨城へ飛べる余裕はない。
なんとか燃料が完全に尽きないうちに着陸しないといけない。
しかし、何処に着陸するか？それが大問題である。
前回のジャンボ・ジョットの時は最後の着陸ギリギリまで燃料がつづいたからなんとか室蘭の埠頭まで行けた。しかし、今回は全く状況が違う。というよりも前回よりも明らかに悪い。
エンジンは今すぐにも止まりそうである。早く着陸場所を選ばねばならない。
（プロペラ機だから道路でも大丈夫だろうけど。けどそれじゃあ走っている車をまきこんじまうし。提無津川緑地公園じゃベンチや野球用のネットで車輪が折れるかも。）
下を見ながら必死に考える。
と、視界内にある場所が見えた。
（帝丹高校！）
偶然にも機種は校庭に向かっている。そこである考えが浮かんだ。
（校庭に着陸できないか？）
なんとかなるかもしれない。ジェットなら無理でもこのプロペラ機なら校庭の広さで充分ではないか。
考えている余裕はない。彼は即決した。
新一
「蘭、着陸するぞ。頭を抱えて踏ん張れ！！」
蘭
「え！？わかった。」
蘭一瞬不安げな声を上げたが、直ぐに言われたとおりにする。
新一は徐々に高度を落とし始める。
ついにここでエンジンが完全に止まりプロペラが空回りを始めた。
先ほどまでしていたエンジンはなくなり、代わりに聞こえるのは過ぎ去る風の音のみである。
幸運な事に、校庭に人影は見えない。特に授業や行事は行われていないようだ。これで滑走する分は問題ない。

高度計の針が回り、速度計の針が０に近づいていく。校庭との距離と、その二つの計器を常に注意しながら飛ぶ。
もし、失速でもしたらそれこそ校庭の手前のビルや家に落ちてしまう。細心の注意を払う。
ビルや道路を走る車が完全に識別できるぐらいに高度が落ちる。
速力４０ノット。もうすぐ着陸である。
校庭の周りにある電線や電柱に機を引っ掛けないようにし、着陸する。
ドスン！！
車輪が地面についた。直ぐにブレーキをかける。フラップも一杯に降ろす。
校庭の向こうは体育館である。もし止まれなければそのまま体育館の壁に激突である。しかし、ブレーキを強くしすぎると、機体が急停止して前に倒れるかもしれない。
砂埃を上げながら機体が走っていき、どんどん体育館が迫ってくる。それとともに速度計の針も徐々に０に近づいていく。
新一
「止まれ！！止まってくれ！！」
そして、祈りは通じた。あと２０ｃｍで壁に衝突というギリギリのところで赤トンボは完全に停止した。
新一
「と、止まった！！」
すぐにベルトを外して後ろの座席に回る。
新一
「蘭！蘭大丈夫か！！」
その声にこたえるように、彼女が顔を上げた。
蘭
「新一、私たち助かったのね。」
新一
「ああ。さあ、逃げるぞ！」

今ここで友人を含む生徒や教師に自分達を見られるのはまずい。
二人は急いで赤トンボから離れた。

着陸（後書き）

というわけで、新一達はなんとか着陸できました。
しかし、まだ快斗達がどうなったのか、そして香代子が背負っている事とは。
色々起こってまいりましたが、ちょっとしばらく更新するまで間があきます。
大学入学で色々忙しくなるので。それでは、次の更新にご期待ください。

再会と願い

燃料切れの赤トンボを、なんとか帝丹高校のグラウンドに不時着させた新一であったが、小さくなった蘭と、今の自分の姿を同級生や生徒達に見せるわけにはいかないので、なんとか現場からの離脱を図っていたが。

新一

「まずいな。」

グラウンドに次々と生徒や教師達が集まってくる。

体育館の隅で様子を伺うが、とても校門まで行けそうにない。

蘭

「どうする？仕方ないからもう皆に言っちゃう？」

蘭がとんでもないことを言い始めた。

新一

「阿呆！！薬の事とかをこれ以上誰かに言えるか！！」

実際のところ、これ以上薬のことが広まるのはまずい。それに加えて、言ったら彼自身、哀からどんなことされるか分かった物ではない。

蘭

「じゃあ新一何とかしなさいよ！！」

何とかできれば苦労しない。

と言いたくなった新一だったが、やめた。言ってもしょうがないからだ。
何とか妙案を捻り出そうとする。
ガシッ！！
誰かに腕を掴まれた。
心臓を何か冷たい手で鷲づかみにされたような気分になる。
慌てて首を振ると、そこには金髪の女性が。
？
「あら、こんなところで何をやっているのかしら？ｃｏｏｌｇｕｙにａｎｇｅｌ？」
新一・蘭
「ジョディ先生！！」
そこにいたのは二人にとっては顔見知りであるＦＢＩ捜査官のジョディー女史であった。
新一
「先生。確かあんたアメリカに帰ったんじゃ。」
あの組織崩壊の時、ＦＢＩは一時アメリカに戻って日本派遣チームの再編成を行っていた。そのため、彼らはあの時日本に不在であった。
その後、彼らが日本に戻ったという話は全く聞いていなかった。
ジョディ
「組織もつぶれちゃったし、もうＦＢＩにいる必要もなくなったから、日本で教員生活をする事にしたの。まあ帝丹高校に赴任できたのは大きな偶然かしら。それよりも、あなたたち一体どうしたの？」
ジョディにしてみれば、蘭が小さくなったことは知らなかったし、それに元の新一の姿も見たことなかった。おまけに、その新一が軍服を着ているのだから驚いて当然だろう。
新一
「実はですね・・・・・」

新一はジョディに今まで起きた事をかいつまんで話した。
ジョディ
「なるほどね。日本のＣＩＡについては聞いたことあったけど、まさかあなたたちを追っているとはね。」
新一
「もっとも、今はＣＩＡよりもここからどう動くかなんですが。」
ジョディ
「だったら、私がここから逃がしてあげるわ。裏に回って駐車場にいくわよ。そこから私が車で阿笠邸まで送るわ。」
なんと幸運な事であろうか。
新一
「だったらお願いします。」
こうして3人は駐車場に向かった。
ジョディ先生が誰かいないか確認しながら進んだので、人と鉢合うことはなかった。
そして、生徒や教師の注意はグラウンドに向いていたから駐車場には誰もいなかった。
ジョディ先生が素早く自分の車のエンジンをかける。
ジョディ
「さあ、早く乗って！！」
2人も乗り込んだ。
こうして3人は阿笠邸に向かった。
新一
「けどいいんですか先生。これって職務放棄になりません？」
その新一の心配に、ジョディ先生は笑って答えた。
ジョディ
「大丈夫よ。ちょうど私職員室にいた時だったから。けどまさか飛行機に乗って現れるとは思わなかったわ。」
新一・蘭
「ははは・・・・」

ジョディの言葉に苦笑いする2人。
ジョディ
「さっきの話だけど、もう少し詳しく聞かせてくれない。」
新一
「はい・・・・・・」
新一は今日起きた事をさらに詳しく話した。
ジョディ
「それはまた大変なことになったわね。けど、じゃあその黒羽君たちは何処に言っちゃったの？」
新一
「わかりません。はぐれてしまいましたから。」
新一としても、彼らの無事を祈るしかない。
蘭
「大丈夫よ。黒羽君なら。」
新一
「・・・・・そうだな。」
その後3人は終始無言であった。

再会と願い（後書き）

というわけで、まだまだ話は続きますが。取り合えずここで第一部終了とさせていただきます。

第二部は別のタイトルで行く予定です。

ここまで読んでいただき、読者の方々に感謝します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3285b/

失われし物を求めて

2011年1月23日21時56分発行